

大菩薩峠

甲源一刀流の巻

中里介山



この小説「大菩薩峠」全篇の主意とする処は、人間界の諸相を
きよくじん
曲尽して、大乘遊戯だいじょうゆげの境に参入するカルマ曼陀羅まんだらの面影を大凡下
の筆にうつし見んとするにあり。この着想前古に無きものなれ
ば、その画面絶後の輪郭を要することは非無かるべきなり。読
者、一染いっせんの好憎に執し給うこと勿れ。至嘱ししよく。

著者謹言

大菩薩峠は江戸を西に距る三十里、甲州裏街道が甲斐国東山梨郡萩原村に入つて、その最も高く最も険しきところ、上下八里にまたがる難所がそれです。

標高六千四百尺、昔、貴き聖が、この嶺の頂に立つて、東に落つる水も清かれ、西に落つる水も清かれと祈つて、菩薩の像を埋めて置いた、それから東に落つる水は多摩川となり、西に流るるは笛吹川となり、いずれも流れの末永く人を湿おし田を
実らすと申し伝えられてあります。

江戸を出て、武州八王子の宿から小仏、笹子の険を越えて甲府へ出る、それがいわゆる甲州街道で、一方に新宿の追分を右

にとつて往くこと十三里、武州青梅おうめの宿へ出て、それから山の中を甲斐いさわの石和へ出る、これがいわゆる甲州裏街道（一名は青梅街道）であります。

青梅から十六里、その甲州裏街道第一の難所たる大菩薩峠は、記録によれば、古代に日本武尊やまとたけるのみこと、中世に日蓮上人にっねんの遊跡があり、降くだつて慶応えいおうの頃、海老蔵えびぞう、小団次こだんじなどの役者が甲府へ乗り込む時、本街道の郡内ぐんないあたりは人氣が悪く、ゆすられることを怖おそれてワザワザこの峠へ廻つたということです。人氣の險悪は山道の險悪よりなお悪いと見える。それで人の上り煩のぼう所わずらは春もまた上り煩うと見え、峠の上はいま新緑の中に桜の花が真盛りです。

「上野原うえのほらへ、盗人ぬすつとが入りましたそうです」

「へエ、上野原へ盗人が……」

「それがはや、お陣屋へ入ったというですがすから驚くでがす」

「驚いたなあ、お陣屋へ盗賊が……どうしてまあ、このごろの
ように盗賊が流行はることやら」

みようけん やしろ

妙見の社の縁に腰をかけて話し込んでいるのは老人と若い男
です。この兩人は別に怪しいものではない、このあたりの山里
に住んで、木も伐れば焼畑やきばたも作るという人たちであります。

これらの人は、この妙見の社を市場として一種の奇妙なる物々
交換を行う。

萩原から米を持って来て、妙見の社へ置いて帰ると、数日を
経て小菅こすげから炭を持って来て、そこに置き、さきに置いてあつ
た萩原の米を持って帰る。萩原は甲斐を代表し、小菅は武蔵を
代表する。小菅が海を代表して魚塩ぎよえんを運ぶことがあつても、萩
原はいつでも山のものです。もしもそれらの荷物を置きばなし

にして冬を越すことがあつても、なくなる気づかいはない——
大菩薩峠は甲斐と武蔵の事実上の国境であります。

右の両人は、この近まわりに盗賊のはやることを話し合つて
いたが、結局、

「どろぼうが怖いのは物持の衆のことよ、こちとらが家はどろ
ぼうの方で怖れて逃げらるわ」

ということに落ちて、笑つて立とうとする時に、峠の道の武州路
の方から青葉の茂みをわけて登り来る人影があります。

「あ、人が来る、お武家様みたようだ」

二人は少しあわて気味で、炭俵や糸革袋が結びつけられた
背負梯子へ両手を突っ込んで、いま登り来るといふ武家の眼を
のがれるもののように、社の裏路を黄金沢の方へ切れてしま
います。

二

ほどなく武州路の方からここへ登つて来たのは、彼等兩人が認めた通り、ひとりの武士でありました。黒の着流しで、定紋じようもんは放れ駒はなごま、博多はかたの帯を締めて、朱微塵しゆみじん、海老鞘えびざやの刀脇差わきざしをさし、羽織はおりはつけず、脚絆草鞋きやはんわらじもつけず、この険しい道を、素足に下駄穿きでサツサツと登りつめて、いま頂上の見晴らしのよいところへ来て、深い編笠あみがさをかたげて、甲州路の方を見廻しました。歳は三十の前後、細面ほそおもてで色は白く、身は痩やせているが骨格は冴さえています。この若い武士が峠の上に立つと、ゴーツと、青嵐あおあらしが崩くずれる。谷から峰へ吹き上げるうら葉が、海の浪がしらを見るようにさわ立つ。そこへ何か知らん、寄せ来る波で岸へ打ち

上げられたように飛び出して来た小動物があります。

妙見の社の上にかぶさった栗の大木の上にかたまつて、武士の方を見つめては時々白い歯を剥むいてキャツキャツと啼なく。その数、十匹ほど、ここの名物の猿であります。

柳沢峠が開けてから後の大菩薩峠というものは、全く廃道同様になつてしまいましたけれど、今日でも通れば通れないことではないのです。そこを通つて猿に出くわすことは珍めずらしいことではないが、それを珍いたずららしがつて悪戯いたずらでもしかかけようものなら、かえつて飛んだ仕返しを食うことがあります。人の弱味よわみを見るに上手じょうずなこの群集動物は、相手を見くびると脅迫きようはくする、敵かなわない時は味方みかたを呼ぶ、味方はこの山々谷々から呼応して来るのですから、初めて通る人は全くおどかされてしまいます。が、旅に慣なれた人は、その虚勢を知つて自らおのずかそれに処するの道がある

のであります。

右の武士は、慣れた人と見えて、ひとめ一目猿を睨みつけると、猿は怖れをなして、なお高い所から、しきりに擬勢ぎせいを示すのを、取合わず峠の前後を見廻して人待ち顔です。

さりとて容易に人の来るべき路ではないのに、誰を待つのであろう、こうして小半時こはんときもたつと、木の葉の繁みを洩もれて、かすかに人の声がします。その声を聞きつけると、武士はズカズカと萩原街道の方へ進んで、松の木立から身を斜めにして見おろすと、羊腸ようちようたる坂路のうねりを今しも登つて来る人影は、たしかに巡礼の二人づれであります。

「お爺さん——」

よく澄んだ子供の声がします。見れば一人は年寄としよりで半町ほど先に、それと後おくれて十二三ぐらいの女の子——今「お爺さん」と

呼んだのは、この女の子の声でありました。

右の二人づれの巡礼の姿を認めると、何と想着てか武士は、つと妙見堂のうしろに身をかくします。木の上では従前の猿が眼を円くする。

「やれやれ頂上へ着いたわい、おお、ここにお堂がござる」

年寄の方の巡礼は社の前へ進んで笠の紐を解いて跪かしてまると、

「お爺さん、ここが頂上かい」

おもだち面立の愛らしい、元氣もなかなかよい子でありました。

「これからは下り一方で、日の暮までに河内泊かわちどまりは楽なものだ、

それから三日目の今頃は、三年ぶりでお江戸の土が踏める――

さあお弁当をたべましょう」

ろうや老爺は行李こうりを開いて竹の皮包を取り出すと、女の子は、

「お爺さん、その瓢箪ひょうたんをお貸しなさい、さつきこの下で水音が

しましたから、それを汲んでまいりましょう」

「おおそうだ、途中で飲んでしまったげな。お爺さんが汲んで来ましよう、お前はここで休んでおいで」

腰なる瓢箪を抜き取ると、

「いいのよ、お爺さん、あたしが汲んで来るから」

女の子は、老人の手から瓢ふくべを取って、ついこの下の沢に流る清水を汲もうとて山路やまじをかけ下ります。

老人は空むなしくそのあとを見送って、ぼんやりしていると、不意に背後うしろから人の足音が起ります。

「おやじ
「老爺」

それはさいぜんの武士でありました。

「はい」

老爺は、あわただしく居ずまいを直して挨拶あいさつをしようとする

時、かの武士は前後を見廻して、

「ここへ出ろ」

編笠も取らず、用事をも言わず、小手招きこてまねするので、巡礼の老爺は怖る怖る、

「はい、何ぞ御用でござりまするか」

小腰こしをかがめて進み寄ると、

「あつちへ向け」

この声もろともに、パツと血煙が立つと見れば、なんという無残むざんなことでしょう、あつという間もなく、胴体どうたい全く二つになつて青草の上にのめつてしまいました。

「お爺さん、水を汲んで来てよ」

瓢箪を捧げた少女は、いそいそとかけて来たが、老人の姿の
見えぬのを少しばかり不思議がつて、

「お爺さんはどこへ行つたろう」

お堂の裏の方へでも行つたのかしらと、来て見ると、

「あれ——」

瓢を投げ出して縋りついたのは老人の亡骸でした。

「お爺さん、誰に殺されたの——」

亡骸をかき抱いて泣きくずれます。

ここにこの不慮の椿事を平気で高見の見物をしていたものが
あります。さいぜんの武士の一挙一動から、老人の切られて少
女の泣き叫ぶ有様を目も放さずながめていたのは、かの栗の木
の上の猿です。

猿どもは、今や木の上からゾロゾロと下りて来ました。老少二人の伏し倒れた周囲を遠くからとりまいて、だんだんに近寄ると、小さな奴がいきなり飛び出して、少女の頭髮にさしてあつた小さな簪をちよつとつまんで引き抜き、したり顔に仲間ものに見せびらかすような身振をする。それを見た、も一つの小猿は負けない気で、少女の頭髮から櫛を抜き取つて振りかざす。その間に大猿どもは、さきに老爺が開きかけた竹の皮包の握飯を引き出して口々に頬ばつてしまうと、今度は落ち散つていた手頃の木の枝を拾つて、何をするかと思えば、刀を差すようなふうに腰のところへあてがい、少女の背後へ廻つて抜打ちに——つまりさいぜんの武士のやった通りに——その木の枝で少女の背中をなぐりつけました。

我を忘れて泣き伏していた少女は、この不意の一撃で、

「あれ——」

と飛びのいたが、きじよう氣丈な子でした、すぐにあり合わす木の枝を拾い取つて振り上げると、猿どもは眼を剥むき出し白い齒を突き出してキャツキャツと叫びながら、少女に飛びかかろうとして、ものすじ物凄い光景になりましたが、折よくそこへ通りかかった旅の人があります。

年配は四十ぐらいで、すげがさ菅笠をかぶつてたてじま豎縞の風合羽かざがつばを着、道中差を一本さしておりましたが、手に持っていた松明たいまつの火を振り廻すと、今までおご驕っていた猿どもが、急に飛び散らかつて、我れ勝ちにもとの栗の大木へと馳はせ上ります。

旅に慣れた証拠は、この旅人の持つている松明でわかります。大菩薩を通るものは獸類を逐おうべく、松の木のヒデというところろでこしらえた松明を用意します。獸類のなかでも猿はことに

火を怖^{おそ}れるものであります。右の旅人はその松明を消しもせず、

「姉^{ねえ}さん、怪^け我^がはなかつたかね」

近く寄つて見て、

「おやおや、人が斬^きられてゐる！」

少女を掻^かき分け死骸^{しがい}へ手をかけ、その斬口^{きりぐち}を検^{しら}べて見て、

「よく斬^きつたなあ、これだけの腕前^{うでまえ}をもつてゐる奴^{やつ}が、またなんだつてこんな年寄^{としより}を手^てにかけたろう」

旅人は歎息^{たんそく}して何^{なに}をか暫^{しばらく}らく思案^{しあん}していたが、やがて少女を慰^{なぐさ}め励^{はげ}まして、ハキハキと老爺^{おやじ}の屍骸^{しかい}を押片^{おしぺ}づけ、少女を自分の背^せに負^おうて、七ツ下^{さが}りの陽^ひを後^{あと}ろにし、大菩薩峠^{だいぼさつとう}をずんずんと武州路^{ぶしゅうろ}の方^{ほう}へ下^{くだ}りて行^いきます。

大菩薩峠を下りて東へ十二三里、武州の御岳山みたけさんと多摩川を隔

てて向き合つたところに、柚ゆずのよく実る沢井という村がありま

す。この村へ入ると誰の眼にもつくのは、山を負うて、冠木門かぶきもん

の左右に長蛇ちようだの如く走る白壁に黒い腰をつけた塀へいと、それを越

した入母屋風の大屋根であつて、これが机竜つくえりゆう之助の邸宅であり

ます。

机の家は相馬そうまの系統を引き、名に聞えた家柄であるが、それ

よりもいま世間に知られているのは、門を入ると左手に、九歩

と五歩とに建てられた道場であります。いつでもこの道場に武

者修行の五人や十人ゴロゴロしていないことはないものでありま

したが、今日はまた話がやかましい。

「お聞きなされましたか、昨日とやら大菩薩に辻斬つじぎりがあつたそ

うにござります」

「ナニ、大菩薩に辻斬が……」

「年とった巡礼が一人、生胴いきどろうをものの見事にやられたと甲州から来た人の専らもっぱらの噂うわさでござりまする」

「やれやれ年寄の巡礼が、無残むざんなことじゃ」

「近頃の盗人沙汰ぬすびとぎたと言ひ、またしても辻斬、物騒ぶつそう千万せんばんなこと

ございますな」

「左様さよう、なにしろこの街道筋かいどうすじは申すに及ばず、秩父ちちぶ、熊谷くまがやから上州、野州へかけて毎日のように盗人沙汰、それでやり口がみな同じようなやり口ということでございます」

「いかにも。それほどの盗賊に罪人は一人もあがらぬとは、八州の腹切はらぎりものだ」

「それにしても、この沢井村界限かいわいに限って、盗賊もなければ辻

斬もない、これというも、つまり沢井道場の余徳でありますな」
沢井道場で門弟食客連がこんな噂をしているのは、前段大菩薩峠の殺人の翌々日のことでありました。

「さて、道具無しの一本」

「心得たり、若先生の型を」
かた

門弟二人が左右に分れると、

「沢井道場名代なだいの音無おとなしの勝負」

こうじょう

口上まがいで叫ぶ者がある。

沢井道場音無しの勝負というのは、ここの若先生、すなわち

机竜之助が一流の剣術ぶりを、そのころ剣客仲間の呼慣ならわしで、

竹刀しなにあれ木剣にあれ、一足一刀の青眼に構えたまま、我が刀

に相手の刀をちつとも触さわらせず、二寸三寸と離れて、敵の出る

頭かしら、出る頭を、或いは打ち、或いは突く、自流他流と敵の強弱

に拘かわらず、机竜之助が相手に向う筆法はいつでもこれで、一試合のうち一度も竹刀の音を立てさせないで終ることもあります。机竜之助の音無したちさきの太刀先に向つては、いずれの剣客も手古摺てこずらぬはない、竜之助はこれによつて負けたことは一度もないのであります。

その型をいま二人は熱心にやっていると、おりから道場の入口とは斜めに向つた玄関のところで、

「頼む」

中では返事がない。

「頼みましよう」

まだ誰も返答をするものがない。そのうちに、こちらの立合たちあいは、一方が焦じれて小手こてを打ちに来るのを、得たりと一方が竹刀を頭にのせて勝負です。

「お頼み申します」

勝負が終えて気がついた門弟連が、こちらから無遠慮ぶえんりよに首を突き出して見ると、お供の男を一人つれて、見事に装よそおうた若い婦人の影が植込の間からちらりと見えました。

「拙者せつしやが応対して参ろう」

いま立合をして負けた方のが、道場から母屋おもやへつづいた廊下をスタスタと稽古けいこ着はかまに袴はかまのまま出てゆくと、

「安藤さん、若い女子おなごのお客と見たら臆面おくめんなしに応対にお出かけなすった」

皆々笑っていると、

「ドーレ」

安藤の太い声。ややあつて女の優やさしい声で、

「あの、手前は和田の宇津木うつぎ文之丞ぶんのじやうが妹にござりまする、竜之

助様にお目通りを願ひとう存じまして」

「ハハ左様さようでござるか」

姿は見えないけれども、安藤がしゃちほこばった様子が手に取るようです。

「その若先生はな」

いよいよ安藤は四角ばって、

「ただいま御不在でござるが」

「竜之助様はお留守るす……」

女はハタと当惑したらしく、

「左様ならば、いつごろお帰りでございましょうか」

「さればさ、うちの若先生のこととでござるから、いつ帰るとお

請うけあ合あいも致し兼ねるで……」

「遅くとも今宵こよいはお帰りでございましょう」

「それがその、今申す通り、いつ帰るとお請合いを致し兼ねるが、次第によりては拙者ども御用向を承り置きまして」

安藤と来客の若い婦人との問答を道場の連中は面白がつて洩れ聞いておりましたが、

「若先生に直談判じかだんぱんというて美しい女子おなごが乗り込んで来た、前代未聞の道場荒し」

「見届けて参りましょうか」

みずかみずか すすすす 自ら薦めて斥候ものみの役を承ろうとする者がある。

「賛成賛成、裏口から廻つて見て参られい」

ますます御苦労さまな話で、まもなくあたふたと走せ戻つて、

「見届けて参りました、確かに見届けて参りました」

息を切つての御注進ごちゆうしんです。

「どのような女子じゃ」

「あれは和田の宇津本文之丞様の奥様でござりまする、しかも評判の美人で……」

「ナニ、和田の宇津木の細君さいくんか、さいぜん妹だというたではないか」

「いいえ、お妹御ではございませぬ、まだ内縁でございまして甲州の八幡村やわたからついこの間お越しのお方、発明で、美人で、お里がお金持で評判もの、私は、八幡におりました時分から、篤とくとお見かけ申しました」

「文之丞の細君が何故に妹と名乗って当家の若先生を訪ねて来たか、それが解げせぬ」

「あ、若先生のお帰り」

無駄口がパタリとやんで、見れば門をサツサツと歩み入る人は、思いきや、一昨日、大菩薩の上で巡礼を斬った武士——し

かも、なり、もふり、もその時のままで。

五

竜之助の前には、宇津木の妹という、島田に振袖ふりそでを着て、緋縮緬ひぢりめんの間着あいぎ、鶉色ひわいろじゆうす襦子の帯、引締まった着こなしで、年は十八九の、やや才氣さいきばしった美人が、しおらしげに坐っています。

「お浜どのとやら、御用の筋すじは？」

竜之助の問いかけたのを待つて、

「今日、兄を差置き折入こしりようつてお願いに上りましたは」

歳にはませた口上こうじようぶりで、

「ほかでもござりませぬ、五日の日の御岳山みたけさんの大試合のことに
つきまして……」

竜之助もいま歸つて、その組状を見たばかりのところでした。そうして机の上に置かれた長い奉書の紙に眼を落すと、女は言葉を継いで、

「その儀につきまして、兄はことごとく心を痛め、食ものどへは通らず、夜も眠られぬ有様でござりまする故、妹として見るに忍びませぬ」

「大事の試合なれば、そのお心づかいも御尤ごもつともに存じ申す、我等とても油断なく」

素気すげなき答え方。女は少し焦せき込んで、

「いえいえ、兄は到底とうていあなた様の敵ではござりませぬ、同じ逸見へんみの道場で腕を磨いたとは申せ、竜之助殿と我等とは段違いと、つねづね兄も申しております。人もあろうに、そのあなた様に晴れのお相手とは何たること、兄の身が不憫ふびんでなりませぬ」

「これは早まつたお言葉、逸見先生の道場にて我等如きは破門同様の身の上なれど、文之丞殿は師の覚えめでたく、甲源一刀流こうげんいつとうりゅうの正統はこの人に伝わるべしとさえ望みをかけらるるに」

「人がなんと申しましようとも、兄はあなた様の太刀先たちさきに刃向はむかう腕はないと、このように申し切っておりまする」

「それは御謙遜ごけんそんでござろう」

竜之助は木彫きぼりの像を置いたようにキチンと坐つて、面かおの筋すじ一つ動かさず、色は例の通り蒼白あおしろいくらいで、一言ひとことものを言つて

は直ぐに唇を固く結んでしまします。女はようやく躍起やつきとなるような調子で、頬にも紅べにがさし、眼も少しかがやいてきたが、

「もしもこのたびの試合に恥辱を取りますれば、兄の身はもとより、宇津木一家の破滅でござりまする。ここを汲み分けて、今年限り、兄が身をお立て下さるよう、あなた様のお情けにす

がりとく、これまで推参致すいさんしました、なにとぞ兄の身をお立て下されまして」

女は涙をはらりと落して、竜之助の前にがつくりと結立ゆいたての髪を揺ゆるがしての歎願です。

竜之助は眼を落して、しばらく女の姿をみつめておりました
が、

「これはまた大仰おおぎような。試合は真剣の争いにあらず、勝負は時の運なれば、勝つたりとて負けたりとて、恥はじでも誉ほまれでもござるまい、まして一家の破滅などとは合点がてんなり難がたき」

冷ひややかな返事です。

女が再び面をあげた時、涙に輝いた眼と、情に熱した頬とは、
一方ひとかたならぬ色香いろかを添えつ、

「何もかも打明けて申し上げますれば、兄はこのたびの試合済

み次第に、さる諸侯へ指南役に召抱えらるる約束定まり、なおその時には婚礼の儀も兼ねて披露を致す心組みでおりましたところ……」

「それは重ねがさね慶たきこと、左様ならばなお以て試合に充分の腕をお示しあらば、出世のためにも縁談にも、この上なき誉を添ゆるものではござらぬか」

「それが折悪しく……いや時も時とてあなた様のお相手に割当てられ、勝ちたいにもその望みはなく、逃げましてはなお以て面目立ちませぬ。ただ願うところはあなた様のお慈悲、武士の情けにて勝負をお預かり置き下さらば生々の御恩に存じます。兄のため、宇津木一家のために、差出がましくも折入つてのお願いでござりまする」

この女の言うことがまことならば、いじらしいところがあり

ます。兄のため、家のためを思つて、女の一心でこれまで説きに來たものとあれば、その心根こころねに対しても、武士道の情けとやらで、花を持たして帰すべきはずの竜之助の立場でありましよう。ところが、蒼白あおしろい面かおがいよいよ蒼白く見えるばかりで、「お浜どのとやら、そなた様を文之丞殿お妹御と知るは今日こんにちが初めながら、兄を思い家を思う御心底、感じ入りました。されど、武道の試合はまた格別」

格別！ と言ひ切つて、口をまた固く結んだその余音よいんが何物を以ても動かせない強さに響きましたので、いまさらに女は狼狽ろうばいして、

「左様さようならば、あの、お聞入きこいれは……」

声もはずむのを、竜之助は物の数ともせぬらしく、

「劍を取つて向う時は、親もなく子もなく、弟子も師匠もない、

入魂^{じっこん}の友達とても、試合とあれば不倶戴天^{ふぐたいてん}の敵と心得て立合う、それがこの竜之助の武道の覚悟でござる」

竜之助はこういう一刻^{いっこく}なことを平気で言つてのける、これは今日に限ったことではない、常々この覚悟で稽古もし試合もしているのですから、竜之助にとつては、あたりまえの言葉をあたりまえに言い出したに過ぎないが、女は戦慄^{みふるい}するほどに怖れたので、

「それはあまりお強い、人情知らずと申すもの……」
涙をたたえた怨み^{うらみ}の眼に、じつとお浜は竜之助の面^{おもて}を見やります。

竜之助の細くて底に白い光のある眼にぶつかつた時に、蒼白かつた竜之助の顔にパツと一抹^{いちまつ}の血が通うと見えましたが、それも束^{つか}の間^まで、もとの通り蒼白い色に戻ると、膝を少し進めて、

「これお浜どの、人情知らずとは近ごろ意外の御一言、物に譬^{たと}うれば我等が武術の道は女の操^{みさお}と同じこと、たとえ親兄弟のためなりとて操を破るは女の道でござるまい。いかなる人の頼みを受くるとも、勝負を譲るは武術の道に欠けたること」

「それとても親兄弟の生命^{いのち}にかかわる時は……」

「その時には女の操を破つてよいか」

六

宇津木の妹を送り出したのは夕陽^{ゆうひ}が御岳山の裏に落ちた時分です。しばらくして竜之助の姿を、万年橋の下、多摩川の岸の水車小屋の前で見ることができました。

「与八！ 与八！」

夜は水車が廻りません、中はひっそりとして鼠の逃げる音、
微かな燈火の光。

「誰だい」

まだるい返事。

「竜之助だ、ここをあけろ」

「へえ、今……」

やや狼狽の体。やがて中からガラリと戸が開かれると、面は

子供のようで、形は牛のように肥った若者です。

「与八、お前に少し頼みがあつて、お前の力を借りに来た」

「へえ」

この若者は、竜之助を見ると竦んでしまうのが癖です。

「与八、お前は力があるな、もつとこつちへ寄れ」

耳に口をつけて何をか囁くと、与八は慄え上つて返事ができ

ない。

「いやか」

「だつて若先生」

「いやか——」

竜之助から圧迫されて、

「だつて若先生」

与八は齒の根が合わない。

「俺^{おれ}をお斬りなさる氣かえ」

「いやか——」

「行きます」

「行くか」

「行きます」

「よし、ここに縄もある、手拭もある、しつかりやれ、やりそ

こなうな」

七

竜之助の父弾正だんじょうが江戸から帰る時に、青梅近くの山林の中で子供の泣き声がするから、伴ともの者に拾わせて見ると丸々と肥つた当歳児であつた、それを抱き帰つて養ひ育てたのがすなわち今日の与八であります。与八という名もその時につけられたのですが、物心ものごころを覚えた頃いじになつて、村の子供に「拾つちいっ子、拾いっ子」と言つて苛められるのを辛がつて、この水車小屋へばかり遊びに来ました。その時分、水車番には老人が一人いた、与八はその老人が死んだ時はたしか十二三で、そのあとを嗣ついで水車番になつたのです。

与八の取柄とりえといつては馬鹿正直と馬鹿力です。与八の力は十二三からようやく現われてきて、十五になつた時は大人の三人前の力をやすやすと出します。十八になつた今日では与八の力は底が知れないといわれている。荷車が道路へメリ込んだ時、いかだ筏が岩と岩との間へはさまつた時、そういう時が与八の天下で、すぐさま人が飛んで来ます。

「与八、米の飯を食わせるから手を貸してくれやい」

「うん」

そして、大八車でも杉の大筏でも、ひとたび与八が手をかければ、苦もなく解放される。お札心に銭ぜになどを出しても与八は有難ありがたがらない、米の飯を食わせれば限りなく悦よろこぶ、それに鮭さけの切身でもつけてやろうものなら一かたげに三升ぐらいはペロリと平たいらげてしまいます。米の飯を食わせなくても、与八がそんな

に不平を言わないのは、小屋へ帰れば麦の飯と焼餅とを腹いっぱい食い得る自信を持つてゐるからであるが、ずるい奴が、米の飯を食わせる食わせるといつてさんざん与八の力を借りた上、米の飯を食わせずに済すまそうとする、二度三度重かさなると与八は怒つて、もう頼みに行つても出て来ない、その時は前祝いに米の飯を食わせると、前のことは忘れてよく力を貸します。

与八が村へ出るのをいやがるのは、前申す通り子供らがヨツパだの拾いつ子だの言つて、与八が通るのを見かけていじめるからです。それで水車小屋の中にのみ引込んでゐるが、感心なことには、毎朝欠かさず主人弾正の御機嫌伺ごきげんうかがに行きます。

「おおせんせい大先生の御機嫌はいいのかい」

女中やといおとこや雇男が、

「ああ好いよ」

と答えると、に、つ、こ、り、して帰つてしまふ。竜之助の父弾正は老年の上、中氣ちゆうきをわずらつて永らく床に就いています。

竜之助から脅迫きようはくされて与八が出て行くと、まもなく万年橋の上から提灯ちようちんが一つ、巴ともえのように舞つて谷底に落ちてゆく。暫くしばらして与八は、一人の女を荒々しく横抱きにして、ハッハッと大息を吐いて、竜之助の前に立っています。与八に抱かかえられている女は、さつき兄のためと言つて竜之助を説きに來た宇津木のお浜であります。

それからまた程経ほどへて、河沿いの間道かんどうを、たった一人で竜之助が帰る時分に月が出ました。

竜之助が万年橋の詰つめのところまで来かかると、ふと摺違すれちがったのが六郷下りの筏師いかだしとも見える、旅の装いよそおをした男で、振分けの荷を肩に、何か鼻歌をうたいながらやつて来ましたが、竜之助の姿を見て、ちよつと驚いたふうで、やがて丁寧ていねいに頭を下げ、

「静かな晩景ばんげでござりやす」

竜之助はやり過ぎした旅人を見送っていたが、

「少し待て」

「へい」

「お前はどこから来た」

「へい、氷川ひかわの方から」

「氷川？ 氷川の何というものだ、名は……」

「へい、七兵衛と申します筏師で」

「待て、待てと申すに」

「何ぞ御用で……」

立ち止まるかと思うとかの男は身をひるがえ翻して逃げようとするのを、竜之助は脇差に手をかけて手練しゅれんの抜打ち。

あなど

侮り切つて刀へは手をかけず、脇差の抜打ちで払つた刃先はさきを

どう潜くぐつたか、旅の男は飛鳥ひちようの如く逃げて行きます。竜之助は

自分の腕を信じ過ぎた形になつて、切り損じた瞬間に呆然ぼうぜんと、

逃げ行く人影をみつめて立っている。

早いこと、早いこと、飛鳥ひちようといおうか、弾丸といおうか、四十八間ある万年橋の上を一足に飛び越えたか、その男の身体からだはまるで宙にあるので、竜之助はその迅はやさにもまた気を抜かれて、追いかけることをも忘れてしまったほどでした。

脇差の切先きつさきを調べて見ると肉には触れている、橋の上をよく

よく見ると血の滴りしたたが小指で捺おしたほどずつ筋すじを引いてこぼれております。竜之助は右の男を斬り殺そうとまでは思わなかったが、斬ろうと思うた程度よりも斬り得なかつたことが、よほど心外であるらしく、齒咬はがみをして我家の方かたをさして行くと、邸のあたりが非常に混雑して提灯ちようちんが右往左往うおうさおうに飛びます。

「あ、若先生、大変でござります、賊が入りました」

「賊が？」

邸の中へ入って調べて見ると、この時の盗難が金子きんす三百両と

秘蔵の藤四郎とうしろう一口ふり。

「届けるには及ばぬ、このことを世間へ披露ひろうするな」
なにゆえか竜之助は家の者に口留めをします。

宇津本文之丞が妹と称して沢井の道場へ出向いたお浜は、実は妹ではなく、甲州八幡村やわたのさる家柄の娘で、文之丞が内縁の妻であることは道場の人々があらかじめ察しの通りであります。

お浜は才氣の勝った女で、八幡村にある時は、家のことは自分が切つて廻し、村のことにも口を出し、お嬢様お嬢様と立てられていたその癖があつて、宇津木へ縁づいてまだ表向きでないうちから、モウこんな策略を以て良人おつとの急を救わんと試みたわけです。

宇津木の家は代々の千人同心で、山林田畑でんぱたの産も相当あつて、その上に、川を隔てて沢井の道場と双び立ならつほどの剣術の道場を開いております。

竜之助の剣術ぶりは、形かたの如く悪辣あくらつで、文之丞が門弟への扱

いぶりは柔^{やわ}かい、その世間^{せけん}体の評判は、竜之助よりずっとよろしい。お浜もそれやこれやの評判に聞き惚れたのが、ここへ来た最も有力なる縁の一つであつたが、実際の腕は文之丞がとうてい竜之助の敵でないことを玄人^{くろうと}のなかの評判に聞いて、お浜の気象^{きしょう}では納まり切れずにいたところを、このたび御岳山上の試合の組合せとなつてみると、文之丞の悲観歎息ははたの見る目も齒痒^{はがゆ}いのであります。お浜は焦^じれてたまりませんでした、それでも良人の危急を見過ごしができないで、われから狂言を組んで机竜之助に妥協の申入れに行つたのが前申す如き順序であります。

その晩、お浜は口惜^{くや}しくて口惜しくて、寝ても寝つかれませんでした。

憎い憎い竜之助、齒痒い齒痒い我が夫、この二つが一緒になつて、頭の中は無茶苦茶に乱れます。竜之助と文之丞とは、お浜の頭の中でまんじ卍となり巴となつて入り乱れておりますが、ここでもやはり勝目はかちめ竜之助にあつて、憎い憎いと思いつつも、その憎さは勝ち誇つた男らしい憎きで、その憎さが強くなるほど我が夫の意気地のなさが浮いて出て、お浜のような氣の勝つた女にはたまらない業腹ごうはらです。

縁を結ぶ前には、門弟は千人からあつて、腕前は甲源一刀流の第一で、どうしてこうしてと、それが何のざま、さんざん腹を立てても、やっぱり帰するところは我が夫の意気地のないということに帰着して、どうしても夫をさげすむ心が起つてきます。夫をさげすむと、どうしてもまた憎いものの竜之助の男ぶりが上つてきます。妻として夫を侮あなどる心の起つたほど不幸なこ

とはない。

もしも自分が強い方の人であつたならば、どのくらい気強く、肩身も広かろう。武術の勝負と女の操。竜之助のかけた謎が頑なぞとして今も耳の端で鳴りはためくのです。

邸で会つた竜之助と、水車小屋の竜之助。その水車小屋では、穀物をはかる斗桶とおけに腰をかけていた竜之助。神棚の上には蜘蛛くもの巣に糠ぬかのくつついた間からお燈明とうみょうがボンヤリ光っていた、気がついた時は自分は縛られていた、上からじつと見据みすえた竜之助。

冷やかな面かおの色、白い光の眼、人の苦しむのを見て心地こころよさそうに、

「試合の勝負と女の操」
と言つて板の間を踏み鳴らした。

それから、その時の竜之助の姿が眼の前にちらついて、憎い憎い念が、いつしか色が変わって妙なものになり行くのです。

「お山の太鼓が朝風に響く時まで、にこの謎を解けよ」

という一言。それを思い出すごとにお浜の胸の中で早鐘が鳴ります。

その夜、竜之助は己が室に夜更くるまで黙然として、腕を胸に組んで身動きもせずに坐り込んでいます。

人を斬ろうとして斬り損じたこと、秘蔵の藤四郎を盗まれたこと、そのほかに、考えても考えても、わけのわからぬものが一つあるのです。与八をそそのかして、宇津木のお浜を縄にまでかけて引捕えさしたのは何のためであろう。お浜が邸を出るまでは、そんな考えはなかったが、女が門を出てから、どうしてもこの女をただ帰せないという考えが勃然として起つたので

——竜之助の心には石よりも頑固^{がんこ}なところと、理窟も筋道も通り越^{ちよ}した直情径行^{じやうけいこう}のところと、この二つがあつて、その時もまた、初めは理を説^といて説き伏せたところが、あとはまるで形^{かた}なしのことをやり出した。

それでやはり女のことを考えてみています。

九

机の家に盗難のあつたその翌朝のことです。沢井から三里離れた青梅の町の裏宿^{うらしゆく}の尋常の百姓家の中で、

「おじさん、昨夜^{ゆうべ}はどこへ行つたの」

炉の火を火箸^{ひばし}で掻^かきながら、真黒な鍋で何か煮ていた女の子、これは先日、大菩薩峠で救われた巡礼の少女でありましたが、お

じさんと呼ばれた人はまだ寢床の中に横たわっていたが、ひよいと首をもたげて、

「ナニ、どこへも行きはしないよ」

その面を見れば、これはかの峠で火を焚いて猿を逐い、この巡礼の少女を助けた旅の人でありました。

「でも夜中に目がさめると、おじさんの姿が見えなかったものを」

こう言われて主人は横を向いて、

「ああそれは、雨が降ると困るので裏の山から薪を運んでおい
たのだ」

「そう」

と言つて少女は得心したが、

「おじさん、それでは今日お江戸へつれて行つて下さるの」

たずねてみたが、直ぐに返事がないので、せがんで悪かうと思うたのか、そのままにして仏壇の方にふいと目がつくと、

「お線香をモ一本上げましょう」

たつたいま上げた線香が長く煙を引いているのに、また新しい線香に火をつけて、口の中で念仏を唱え、

「お爺さん、わたしが大きくなったらば、きつと仇を討ちますからね」

ひとりごと
独言を言っている間に眼が曇ってくる。寢床の中で一ぷくつけていた主人はそれを見とがめて、

「お松坊、ちよつとここへおいで」

女の子は横を向いて、そつと眼の縁を払い、

「はい」

主人の前に跪まると、

「おまえは口癖に敵々かたきかたきというが、それはいけないよ、敵討かたきうちとい

うことは侍さむらいの子のすること、お前なんぞは念仏ねんぶつをしてお爺さ

んの後生ごしょうを願つておればよいのだ」

「でもおじさん、あんまり口惜くやしいもの」

また横を向いて、溢あふるる涙を払います。

「口惜しい口惜しいがお爺さんの後生の障さわりになるといけない。

あ、それはそうと、お前を今日はお江戸へつれて行くはずであつたが、私は少し怪我けがをしてな」

「エッ、怪我を！」

「ナニ、大した事じゃねえ、昨夜ゆうべそれ、薪を運ぶとつて転ころんで

腰を木の根にぶつつけたのだよ、二日もしたら癒なおるだろう、江

戸行きはもう少し延ばしておくれ」

「お江戸なんぞはいつでもようござんす、早くその怪我を癒し

て下さい」

「そ言つてくれると有難い。それでな、お松坊、お前に預けておきてえものが一つある」

主人は蒲団ふとんの下を探つて取り出したのが、錦にしきの袋に入れた短刀たんとうのようなもの。

「おじさん、これは何」

「何でもよい、これから大事に懷中へ入れて持つておいで、決して人に見せてはいけないよ」

「これは短刀ではないの」

「うむ、そうだ、用心に肌身はだみをはなさず持つておいで、そのうちにはわかることがあるからな」

少女は何だか合点がてんがゆきません。ようよう寢床しどを這はい出したこの家の主人はかなりの怪我と覺しく、跛足びつこを引き引き炉の傍

までやって来て少女と二人で朝飯を食べていると、

「七兵衛さん、七兵衛さん」

表口で呼ぶ。ここの主人の名は七兵衛というのであるらしい。

「これは嘉右衛門^{かえもん}さん、朝っぱらからどちらへ」

「なに、ちつと見舞に行こうかと思つて」

「お見舞に？ どこへ」

「まだお聞きなさらねえか、材木屋の藤三郎さんが今朝早く上げられなすつて」

「材木屋のあの藤三郎さんが？」

「そうだよ、お役所へ上げられてお調べの最中^{さいちゆう}だよ」

「それはまあ、どうしたわけで」

「何だかわしもよくは知らねえが、盗賊のかかわり合いだということです」

「盗賊のかかり合い？」

七兵衛は思わず小首を傾けながら、

「あの正直な人が盗賊のかかり合いとは、おかしいことですね」

「この間、甲州の上野原のお陣屋へ盗賊が入ったそうで」

「ナニ、上野原のお陣屋へ？」

「そうですよ、お陣屋へ入るとはずいぶん度胸のいい泥棒ですね。ところが泊り合せたお武家に見つけられて、その泥棒が逃げ出したが、その時に泥棒が書付かきつけを一本お座敷へ落したそうで、そいつを拾われちまった」

「書付を拾われた？」

七兵衛は思わず自分のふところを撫なでてみる。

「それからね、どうしたものやらその書付が藤三郎さんところの材木売渡しの受取証文で、ちゃんと印形いんぎようまで据すわっている」

「それはとんだ災難、私もお見舞に上らなくては済みませんが、
昨晚少しばかり怪我をしたものだから、お前さんからよろしく
申しておいておくんなさい」

「怪我をなすつた？」

「なあに、大したことはありません、山でころんで腰をちつと
ばかり強く打つただけのことです」

「そりゃいけねえ、まあ大切にされた方がいい、それじゃ行つて
来ますから」

嘉右衛門が立去つたあとで、七兵衛はなんと考え直したか、
「お松坊、今から江戸へ行こうや」

「でも、おじさんお怪我は？」

「なあに、馬も駕籠かごもあらあな」

「嬉しいこと」

お松は^{おおよろこ}大欣びで食事もそこそこ、はや手の廻りの用意をします。

十

今日は五月の五日、御岳山上へ^{かんはつしゅう}関八州の武術者が集まって奉納試合を為すべき日であります。

机竜之助はこの朝、^{えんがわ}縁側に立つて山を見上げると、真黒な杉が満山の緑の中に天を刺して立っているところに、一むらの雲がかかって、八州の平野に響き渡れよとばかり山上で打ち鳴らす大太鼓の音は、その雲間より洩れて落ちます。

「ああよい天気」

白い雲の山にかかる時は、かえって五月^{さつきば}晴れの空の色を^{あざ}鮮や

かにします。

「奉納日和でござりまするな」
ほうのうびより

門弟連ははや準備をととのえてそこへやって来ました。

竜之助も身仕度をして、いつぞや大菩薩峠の上で生胴を試し
いきどう ため

てその切味きれあじに覚えのある武蔵太郎安国の鍛えた業物わざものを横たえて、

門弟下男ついでうら都合三人を引きつれて、いざ出立の間際しゅつたつ まぎわへ、思いが

けなく駆け込んで来たのは水車番の与八でありました。

「若先生、今この手紙をお前様に渡してくれと頼まれた」

与八の手には一封の手紙、受取って見ると意外にも女文字おんなもじ。

「お山の太鼓が鳴り渡る朝までに解け」と脅おどしたあの謎なぞの、こ

れが心か。

竜之助は忙せわしいうちに、くりかえしてこの手紙を読みました。

十一

この日、宇津本文之丞もまた夙つとに起きて衣服を改め、武運を神に祈りて後、妻のお浜を己おのが居間に招いて、

「浜、誰もおらぬか」

人を嫌けしきった気色は別段に改まつて、愁うれいと決心とが現われている。

「誰も見えませぬ」

「ちと改まつてそなたに申し置くことがあるぞ」

「それは何でござりましょう」

「今日の門出かどでに、これをそなたに遣つかわします」

机の上なるまだ墨の香の新しい一封の書状、お浜は不審ふしん顔がおに手に取って見ますと、意外にもこれは離縁状、俗にいう三行半みくだりはん

でありましたから、

「これは私に下さる離縁状、どうしてまあ」

呆氣あつけに取られて夫の面をみつめていましたが、開き直つて、

「お戯れたわむも過ぎましょう。何の咎とがで私が去状さりじよういただきまする」

「問わず語らず、黙つて別るるがお互いのためであろう」

「まあ、何がどうしたことやら、仔細しさいも聞かずに去状もらいましたと親許おやもとへ戻る女がありましたようか、お戯れにも程がありまする」

「浜、この文之丞が為すことがそちには戯れと見えるか、そなたの胸に思い当ることはないか」

「思い当ることとおつしやるは……」

「言うまいと思えと言わでは事が済まず。そなたは過ぐる夜、机竜之助が手込てごめに遭あつて帰つたな」

「エッ、竜之助殿に手込？」

「隠すより現わるる。下男の久作が行方ゆくえと言ひ、その夜のそなたが素振そぶり、訝いぶかしい限りと思うていたが、人の噂うわさで思い当つた」

「人の噂？ 人がなんと申しました」

お浜は嚇かつとなり、

「あられない噂を言ひがかりに私を逐おい出しなさる御所存か。さほどお邪魔ならば……」

「おお邪魔である、家名にも武名にも邪魔者であればこそ、この去状つかを遣わします」

「口惜くやしいッ」

お浜は、どうするつもりか夫の脇差わきざしを奪い取ろうとするのを、文之丞はとんと突き返したから、殆んど仰向けあおむにそこに倒れました。それを見向きもせず、文之丞は奥の間へ立つてしまいま

す。夫にこう仕向けられて今更お浜が口惜しがるわけではないはずです、文之丞がもしも一倍肯かぬ氣象であつたなら、お浜の首を打ち落して竜之助の家に切り込むほどの騒ぎも起し兼ねまじきものをです。少し気が鎮まつてから、お浜がよくよく考え直したら、ここで離縁を取ったのが結局自分の解放を喜ぶことになるのかも知れない、しかし問題はここを去つてどこへ行くかです、甲州へは帰れもすまい、どこへ落着いて誰を頼る——お浜の頭はまだそこまで行っていないので、ただ無暗に口惜しい口惜しいで伏しつ転びつ憤り泣いているのです。

宇津本文之丞はその間に、すっかり仕度をととのえて、用意の駕籠に乗り、たった一人で、これはワザと門弟衆へも告げずに、こつそりと御岳山をさして急がせます。

和田村から山の麓までは三里。文之丞は襖橋の滝茶屋で駕籠

を捨て、小腋こわきには袋に入れた木剣をかかえ、編笠越しに人目を避けるようにして上って行きます。上って二十四丁目の黒門、こへ来ると鼻の先に本山の頂いただきが円く肥こえて、一帯に真黒な大杉を被かぶり、その間から青葉若葉が威勢よく盛り上もって、その下蔭うぐいすでは鶯うぐいすの鳴く音が聞えます。振返れば山々の打重なつた尾根おねと谷間の外れはずには、関八州の平野の一角が見えて、その先は茫々ぼうぼうと雲に霞かすんでゐる。文之丞はしばしここにゐると、黒門わきの掛茶屋かけちやで、

「お早い御参拜でござります、お掛けなすつていらつしやい」
女の呼び声に応じて茶屋に入り、腰掛で茶を呑のみながら、ふと傍かたえを見ると、茶屋から崖がけの方へ架かけ出した妙に捻ひねった庵室いんしつまがいの小屋に、髯ひげの真白なひとりの老人が、じつとこちらを見えています。老人の前には机があつて、算木さんぎ箆ぜい竹ちくが置いてある。

「易を立てて進しんぜましようかな、奉納試合の御運勢を見て進ぜましようかな」

老人はこう申しますのを、文之丞は首を振って見せた、老人は再びすす勧めようとしません。

おりから坂の下より上つて来たのは、かの机竜之助の一行で、同じくこの茶屋の前で立ち止まりました。

「お早い御参拝でござります、お掛けなすっていらつしやい」

「休んで行こうかな」

竜之助が先に立つて、一行を引きつれて、この黒門の茶屋へ入ります。宇津本文之丞は何なに気なく入つて来た人を見ると、それは自分の当の相手、机竜之助でありましたから、ハツと気色けしきばんだが、幸いに編笠あみがさを被つて隅の方にいたので、先方ではそれと気がつかぬ様子。

先刻の老人はまた首を突き出して竜之助の方に向い、

「易を立てて進ぜましようかな、奉納試合の御運勢を見て進ぜましようかな」

竜之助は老人の面を見て頼むとばかり頷くと、老人は筮竹ぜいちくを取り上げて、

「そもそも愚老えきだんの易断は、下世話げせわに申す当るも八卦はっけ当らぬも八卦の看板通り、世間の八卦見のようにきつと当ると保証も致さぬ代り、きつと外はずれると請合うけあいも致さぬ。愚老は卦面けめんに現われたところによりて、聖人の道を人間にお伝え申すのが務め、当ると当らぬとは愚老とがの咎ではござらぬでな……」

仔細しさいらしく筮竹を捧げて、じつと精神こころを鎮めるこなしよろしくあつて、老人は筮竹を二つに分けて一本を左の小指に、数えでは算木をほどよくあしらつて、首を傾けることしばらく、

「さて卦面けめんに現われたるは、かくの通り『風天小畜ふうてんしょうちく』とござる、卦辞かじには『密雲雨ふらず我れ西郊さいこうよりす』とある、これは陽気なお盛んなれども、小陰さうに妨さまたげられて雨となつて地に下るの功未だ成らざるの象かたちじや」

老人は白髯はくぜんを左右に振分けて易の講釈をつづけます。

「されども、西郊と申して陰の方かたより、陰雲盛んに起るの形あれば、やがて雨となつて地に下る、それだによつて、このたびの試合はよほどの難場なんばじや、用心せんければならん。が、しかし、結局は雨となつて地に下る、つまり目的を遂とげてお前様の勝ちとなる、まずめでたい」

それから老人は易経えいききょうを二三枚ひっくり返して、

「めでたいにはめでたいが、また一つの難儀があるで、よいか、よく聞いておきなされ。象辞しょうじにこういう文句がござる、『夫妻反

目、室を正しゆうする能^{あた}わざるなり』と。ここじや、それ、前にも陽氣盛んなれども小陰に妨げらるるとあつたじや、ここにも夫妻反目とあつて、どうもこの卦面には女子^{おなご}がちらついている』門弟連はまた興に乗つて、妙^{かお}な面をして老人の講釈を聞いていると、

「細君に用心さつしやれ、お前様の奥様がよろしくないで、どうもお前様の邪魔をしたがる象^{かたち}じや。夫妻反目は妻たるものもの不貞不敬は勿論^{もちろん}なれども、その夫たるものにも罪がないとは申し難い。で、細君をギュツと締めつけておかぬとな、二本棒ではいけない……」

これを聞いて門弟の安藤がムキになつて怒り出しました。

「たわけたことを申すな、二本棒とは何じや、先生にはまだ奥様も細君もないのだ。若先生、こんなイカサマ売^{うらない}卜を聞いてい

るは暇つぶし、さあ頂上に一走り致しましょう」

これに応じて、若干の茶代と見料けんりょうとを置いて一行はこの茶屋を立ち去ります。

あとで宇津本文之丞は静かにこの茶屋を出ました。

これから頂上までは僅かの道のりで、二人の行く前後に諸国の武芸者が肩臂かたひじを怒らして続々と登って参ります。

十二

東国の中でも武蔵の国は武道に因ちなみの多い国柄であります。

武蔵という国号からが、そもそも武張ぶばった歴史を持ったもの

やまとたけるのみこと

で、日本武尊が秩父の山に武具を蔵おさめたのがその起源と古くよ

り伝えられています。御岳山の人に言わせると、それは秩父

ではない、この御岳山の奥の宮すなわち「男具那峰」おぐなのみねがそれだとあつて、これを俗に甲籠山こうろうざんとも申します。御岳神社に納められたる、いま国宝の一つに数えられている紫裾濃むらさきずみの甲冑は、これも在来は日本武尊の御鎧おんよろいと伝えられたもので、実は後宇多天皇の弘安四年に蒙古退治の御祈願に添えて奉納されたものだそうです。

さればこの山の神社に四年目毎に行わるる奉納の試合は関東武芸者の血を沸かすこと並々なみなみならぬものがあります。八州の全部にわたり、なお信州、伊豆、甲州等の近国からも名ある剣客は続々と詰めかけ、武道熱心のものは奥州或いは西国から、わざわざ出て来るものもあるくらいで、いずれの剣士もみな免許以上のもの、一流一派を開くほどの人、その数ほとんど五百人に及び、既に数日前から山上三十六軒の御師おしの家に陣取つて、手

ぐすね引いて今日の日を待ち構えている有様です。

以上五百人のうち、試合の場の上るのは百二十人ほどで、拜殿の前の広庭には幔幕まんまくを張りめぐらし、席を左右に取つて、早朝、宮司の式が厳おごそかに済まされると、それより試合は始まりま

す。さて宇津本文之丞は、程なく山へ登つて来て、いったん知合いの御師の家に立寄つて、それから案内されて神前の広庭に出向き、西の詰つめから幔幕を潜くぐつて場へ出て見ると、もはやいずれの席もギツシリ剣士が詰め切つて、衣紋えもんの折目を正し、口を結び目を据すえて物厳ものおごそかに控えております。自分はそつと甲源一刀流の席の後ろにつこうとすると、首座しゆざの方に見ていた同流のこうそく高足広沢某なにがしが招きますから、会釈えしやくして延ひかるる座につき、木刀を広沢に預けて、さて机竜之助はいずれにありやと場内を見廻

したが、姿が見えません。

組の順によつて試合が行われます。いずれも力のはいる見物みもので、三十余組の勝負に時はようやく移つて正午に一息つき、日のようやく傾く頃、武州高槻たかつきの柳剛流りゆうごうりゆう師範雨ヶ瀬某と、相州小田原の田宮流師範大野某との老練な型比かたくらべがあつて後、

「甲源一刀流の師範、宇津本文之丞ふじわらみつづぐ藤原光次」

審判が呼び上げる。この声を聞くと、少しだけかかった場内が引締まつて黒ずんできます。

宇津本文之丞は生年二十七、下り藤ふじの定紋じようもんついた小袖に、襷たすき

を綾あやどり茶宇ちやうの袴、三尺一寸の赤檜あかがしの木刀に牛皮の鰐打つばつたる

を携えて、雪のような白足袋さんきに山氣を含んだ軟らかな広場の土を踏む。少しの間隔あわいを置いて審判が、

「元甲源一刀流、机竜之助相馬宗芳そうまむねよし」

と呼び上げます。

机竜之助と宇津本文之丞、この勝負が今日の見物であるのは、それは机竜之助が劍客中の最も不思議なる注意人物であつたからで、この中にも竜之助の「音無しの構え」に会うて、どうにもこうにも兜かぶとを脱いだ先生が少なくないのです。

今日はこの晴れの場所いで、如何様いの手並てなみを彼が現わすかということが玄人仲間くろうとの研究物けんぎゆうものであつたということと、もう一つは、

机竜之助は甲源一刀流から出でて別に一派を開かんとする野心がある、甲源一刀流から言えば危険なる謀叛人むほんにんで、それが同流の最も手筋てすじよき宇津本文之丞と組み合つたのだから、他流試合よりももつと皮肉な組合せで、故意か偶然か世話人の役割を不審がるものが多かったくらいだから、ああこれは遺恨試合にならねばよいかと老人たちは心配しているものもあつたのです。

呼び上げられて東の詰つめから、幔幕をかき上げて姿を現わした机竜之助は、黒羽くろはぶたえ二重くように九曜くようの定紋ついた小袖に、鞆皮なめしがわの襷たすき、仙台せんだいひら平の袴はを穿はいて、寸尺も文之丞と同じことなる木刀を携えて進み出る。兩人首座の方へ挨拶あいさつして神前に一礼すると、この時の審判すなわち行司役は中村一心齋という老人です。

この老人は富士浅間流せんげんという一派を開いた人で、試合の見分けんぶんには熟練家の誉れを得ている人でありました。

一心齋は麻かみしもの袴てつせんに鉄扇てつせんを持つて首座の少し前のところへ歩み出る。

首座のあたりには各流の老将が威儀をただして控えている中に、甲源一刀流の本家、武州秩父の逸見利恭へんみとしやすの姿が目立って、このたびの試合の勧進元かんじんもとの格に見える。

宇津本文之丞と机竜之助は左右にわかれて両膝を八文字に、

太刀下三尺ずつの間合まあいをとつて、木刀を前に、礼を交わして、お互いの眼と眼が合う。

山上の空気がにわかになくなって大地を圧すかと思われる。たがいの合図で同時に二人が立ち上る。竜之助は例の一流、青眼音無しの構えです。その面おもては白く沈み切っているから、心中の動静は更にわからず、呼吸の具合は平常の通りで、木刀の先が浮いて見えます。

竜之助にこの構えをとられると、文之丞はいやでも相青眼あいせいがん。これは肉づきのよい面にポツと紅べにを潮さして、澄み渡った眼に、竜之助の白く光る眼を真向まっこうに見合せて、これも甲源一刀流な名うての人、相立って両人の間にさほどの相違が認められません。

しかし、この勝負は実に厄介やっかいなる勝負です。かの「音無しの構え」、こうして相青眼をとっているうちに出れば、必ず打たれ

ます。向うは決して出て来ない。向うを引き出すにはこつちで業わざをしなければならんのだから、音無しの構えに久しく立つ者は大抵は焦じれてきます。

こんな立合に、審判をつとめる一心斎老人もまた、なかなかの骨折りであります。

一心斎老人は隙間すきまなく二人の位を見ているが、どちらからもしかけない、これから先どのくらい長く睨にらみ合いが続くか知れたものでない、これは両方を散らさぬ先に引き分けるが上分別じようふんべつとは思ひ浮んだけれども、あまりによく気合が満ちているので、行司の自分も釣り込まれそうで、なんと合図の挟はさみようもないくらいです。

そのうちに少しずつ文之丞の呼吸が荒くなります。竜之助の色あおしろが蒼白さを増します。両の小髻こびんのあたりは汗がボトボトと落

ちます。今こそ分けの合図をと思ふ矢先に、今まで静かであつた文之丞の木刀の先がせきれい鵲鴿の尾のように動き出してきました。業わざをするつもりであろうと、一心斎は咽喉のどまで出た分けの合図を控えて、竜之助の眼の色を見ると、このとき怖るべきけわ險しさに變つておりました。文之丞はと見ると、これも人を殺し兼ねまじき險しさに變つていたので、一心斎は急いで列席の逸見利恭の方を見返ります。

逸見利恭は鉄扇を碎くるばかりに握つて、これも眼中に穩かならぬ色を湛たたえて、この勝負を見張つていたが、「分けよう」という一心斎が眼の中の相談を、なぜか軽く左右に首を振つて肯うけがいません。一心斎は気が気でない、彼が老巧な眼識を以て見れば、これは尋常の立合を通り越して、もはや果し合いの域に達しております。社殿の前の大杉が二つに裂けて兩人の間に落つる

か、行司役が身を以て分け入るかしなければ、この濛々もうもうと立ち騰もつた殺氣ころもというものを消せるわけのものではない。今や毫厘ごうりんの猶予ゆうよも為し難いと見たから、

「分け！」

これは一心斎の独断で、彼はこの勝負の危険を救うべく鉄扇を両刀の間に突き出したのでしよう、それが遅かったか、かれが早かったか、

「突き！」

文之丞から出た諸手突きもろてづは実に大胆にして猛烈を極めたものでした。五百余人の剣士が一斉いっせいにヒヤヒヤとした時、意外にも文之丞の身はクルクルと廻まつて、投げられたように甲源一刀流の席に飛び込んで逸見利恭の蔭に突伏つっふしてしまいました。

机竜之助は木刀を提げたまま広場の真中に突立っています。

十三

間髪^{かんはつ}を容れ^いざる打合いで場内は一体にどよみ渡つて、どつちがどう勝ったのか負けたのか、たしかに見ていたはずなのが自分らにもわからないで度を失うているのを、中村一心斎は真中へ進み出で、

「この立合、勝負なし、分け！」
と宣告しました。

分けにしては宇津本文之丞が自席へ走り込んだのがわからない、一同の面^{おもて}にやや不服の色が顕^{あら}われました。

机竜之助の白く光る眼は屹^{きつ}と一心斎の面に注^{そそ}ぎまして、
「御審判、ただいまの勝負は分けと申さるるか」

片手にはかの木刀を提げたなりで鋭い詰問。一心斎は騒がず、
「いかにも分け、勝負なし」

竜之助はジリジリと一心斎の方に詰めよせて、

「さらば当の相手をこれへ出し候え」

「相手を出すに及び申さぬ、この一心斎が^{けんぶん}見分に不服があらば
申してみられい」

「申さいでか。突いて来た刀を前に進んで外^{はず}し面を打った刀、
何と御覧ぜられし、老眼のお見損^{みそこな}いか」

試合は変じて審判と剣士との立合となつたので、並みいる連
中は安からぬ思い。

しかしこの勝負はいかにも竜之助の言い分通り、或いは一心
斎の見損いではあるまいか、老人なんと返事をするやらと^{きづ}気遣
えば、一心斎は平気なものでカラカラと笑い、

「分けたあとの出来事はこちらの知ったことでない、老眼の見損いとは身知らずのたわごと」

分ける、突く、打つ、その三つの間に一筋の隙すきもないようであるが、分けて考えれば三つになる。

竜之助も口を結んで老人の面を見ていたが、

「しからば再勝負を所望しょうぼうする」

「奉納の試合に意趣は禁物」

一心齋が取合わぬのを竜之助は固く執とつて屈せず、

「未練がましき勝負はかえつて神への非礼、ぜひに再試合所望」
明快な勝負をつけねば決してこの場を去らずという憎々しい
剛情を張っているが、一心齋もまた肯きかぬ氣の一徹者いつてつもので、

「再試合なり申さぬ、強たつてお望みならば愚老が代つてお相手
致いたそうか」

「これは近ごろ面白い」

竜之助は冷やかな微笑を浮べて、

「富士浅間流の本家、中村一心斎殿とあらば相手にとって不足はあるまい、いざ一太刀の御教導を願う」

「心得たり、年は老いたれど高慢を挫く太刀筋は衰え申しぬ」

武芸者氣質で、一心斎は竜之助の剛情が赫と癩に触つたもの

ぶげいしやかたぎ

かつ

しやく

ですから、自身立合おうという。飛んだ物言になつたが、事は面白くなつた。ほんとに立合がはじまつたらそれこそ儲けものと、一同は手に汗を握つていと、

「机氏、机氏、控えさつしやれ」

たまり兼ねて言葉をかけたのは甲源一刀流の本家、逸見利恭です。

逸見利恭は甲源一刀流の家元で、机竜之助ももこの人を師へんみとしやすとして剣道を学んだものでありますから、師弟の浅からぬ縁があるのです。

そもそも一刀流の本源をたずぬれば、その開祖は伊豆の人、伊藤一刀斎かげひさ景久で、その衣鉢いはつを受けたのが神子上典膳忠明（小野治郎左衛門）です。この人、柳生やぎゅうと相並んで、徳川將軍の師範をつとめたほどの名人で、その子小野治郎左衛門忠常が小野派一刀流、伊藤典膳忠也ただなりが忠也派一刀流を打出し、ことに忠也が父忠明より開祖一刀斎の姓と瓶割刀かめわりとうとを許される。それを嗣ついだのが忠明以来の高弟亀井平右衛門忠雄ただおで、これがまた伊藤を名乗る。忠雄の次が新たに溝口派みぞぐちの名を残した人、溝口五左

衛門正勝というものであります。

武蔵国秩父小沢口の住人逸見太四郎義利は、この溝口派の一刀流を桜井五助長政というものに就いて学び、ついにその奥義を究めて、ここに甲源一刀流の一派を開き関東武術の中興と謳われたので、逸見利恭は、その正統を受けた人ですから、机竜之助の剛情我慢を見兼ねて控えろと抑えたのは当然の貫禄があります。

「検審に向い近ごろ過言なり、早々刀を引き候え」

逸見を囲んでいた門下の連中は、一方には宇津本文之丞を介抱する、その他の者は刀に手をかけて、眼を瞋らして竜之助を睨んで、いざといわば飛びかからん気色に見えます。

竜之助はこの体を見て、例の切れの長い白い光のある眼の中に充分の冷笑をたたえて、なんともいわず身をクルリと神前に

向けて一礼し、左手ゆんでに幔幕を上げてきつさと引込んでしまひました。

宇津本文之丞の面上に受けた木刀は実に鋭いもので、ほとんど脳骨を砕かれています。さすがにその場へ打倒れる醜きらさを嫌い、席まで飛び込んで師の蔭に打伏したが、その時はモウ息が絶えていたのです。

机竜之助は試合とは言いながら、宇津本文之丞を打ち殺してしまつたので、無慈悲残忍を極めた立合の仕方であるが、これは文之丞の方で最初しかけて行つたのは明らかで、もしも文之丞があもろてづの諸手突きが極きまつたならば、竜之助の咽喉のどぐえ笛を突き切られて、いま文之丞が受けた運命を自分が受けねばならぬ。あの場合、文之丞がなぜあんな烈しい突きを出したか、あれはやはり人を殺すつもりでなければ出せない突きです。してみれば文

之丞の立合い方もまた不審^{ふしん}千万^{せんばん}で、無慈悲残忍^{いっばん}の一本槍^やで竜之助を責めるわけにはゆかないのです。

よつて竜之助の剛情我慢を憎むものも暫く口を噤^{つぐ}んで、そのあと二番で終る試合の済むのを待っています。

あとの試合には頓着^{とんちやく}なく、机竜之助は、いったん控えの宿へ引取つて着物を着換え、夕餉^{ゆうげ}を済ましてから、また宿を出て雲深き杉の木立を分けて奥^{おく}の宮道^{みやみち}の方へブラリと出かけました。

十五

随神門^{ずいしんもん}を入つて、霧^{きり}の御坂^{みさか}を登り、右の小径^{こみち}を行くと奥の宮七代^{ななよ}の滝へ出る道標があります。御岳山の地味は杉によろしく、見ても胸の透^すく数十丈の杉の木が麓から頂まで生え上っている

中に、この霧の御坂から七代の滝へ下るまでの間は特に大きなものであります。竜之助がこの中へ入ると、雲も霧もまた一緒に捲き込んで行く。

見返れば社殿に上げられた篝火、燈籠の光はトロリとして眠れるものの如く、立ち止まって見るとドードーと七代の滝の音が聞ゆる。

立ち尽していると頭上で御祈祷鳥が鳴く、御岳山の御祈祷鳥は高野の奥に鳴くという仏法僧。

ふと、霧の御坂の方から人の足音がする。

「竜之助様か」

それは女でした。宇津本文之丞が妻の声でした。

「お浜どのか」

「あい」

「……………」

「御用心あそばせ、暗討やみうちがありまする」

「暗討？」

「お前様を討とうとて同流の手利てききが五人、ただいま宿を出てこれへ参りまする」

女の触れた手は熱かったが耳につけた口の息は火のようです。

「お浜どの、ここはあぶない、あれに隠れて」

目の前なる塞さいの神かみの社やしろを指さしますと、

「竜之助様、あなたは斬死きりじにをなさる気か」

お浜は竜之助の行手ゆくてを遮さえぎるようにして、

「あなたがここで斬死をなさるなら、その前にわたしを殺して」

「なに？」

「文之丞は死にました」

お浜の声は震ふるえて低い。

「宇津木の妻は去られて来ました」

竜之助はなんとも言いません。

「どこへ行きましょう」

御祈祷鳥がまた鳴く。

「甲州へは帰られません」

お浜の身は寛ゆるく、そして強くだんだんに竜之助の身を圧おして

来ます。

御祈祷鳥がまたホーホーと鳴く。

「不如帰ほととぎすではないかしら」

お浜はわざと身を横にして杉の木立を仰ぎます。

「竜之助様、なんとかおっしゃって下さい」

竜之助はまだなんとも言いません。

「あなたは刀にお強いように、女にもお強いかな」

お浜の髪の毛が竜之助の首のあたりにほつれる。竜之助は
無言。むじん

夜はいよいよ静かで七代の滝の音のみ爽さわやかに響き渡ります。

霧の御坂でまたしても人の声。

「ああ人が来ます、敵が来ます」

竜之助は勇躍する。

「逃げましょう、逃げましょう、死ぬのはいやいや、逃げて二人は生きましょう」

お浜は身を以て竜之助にすがりつく。

雲と霧とが濛々もうもうとして全山をこめた時、剣鳴りつるぎながする。二人

の姿はそこから消えてしまいました。

ほんごうもとまち

本郷元町に土蔵構えのかなりな呉服屋があつて、番頭小僧とも十人ほどの頭が見え、「山岡屋」と染め抜いた暖簾のれんの前では小僧がしきりに打水うちみずをやつてゐると、

「御免下さいまし」

入つて来たのは百姓てい体の男で、小さい包を抱え、十一二になる小娘を連れていましたのは、あれから一カ月ばかり後のことでしたが、二人とも見たようなと思わるるも道理、男は武州青梅うづらじゆくの裏宿の七兵衛で、娘は巡礼の子お松でありました。

「いらつしやい……」

お客と思つて一斉にお世辞をふりかけると、七兵衛は丁寧に頭を下げて、

「あの、こちら様は山岡屋久右衛門様でござりましょうな」

「はい、手前は山岡屋久右衛門でござい」

小僧はいささか拍子抜けの体でポカンと立っていると、

「手前は武州青梅から参りましたが、旦那様なり奥様なりにお眼にかかりとう存じまして」

「旦那様か奥様にお眼にかかりたいって、いったいお前さん、何の御用だえ」

「へエ、実は御当家の御親類のお娘子をお連れ申しましたので」

小僧は怪訝な面をして、七兵衛とお松の面を等分に見比べて

おりますと、帳場にいた番頭が口を出して、

「手前どもの親戚の娘子をお連れ下さいましたとな」

「はい、以前本町に刀屋を開いておいでになった彦三郎様のお嬢様と申せば、旦那様にも奥様にもおわかりになるそうで、こ

のお娘御むすめごがそれでございます」

七兵衛はお松を引合わせると、番頭は変な面かおをしていました
が、小僧を呼んで、

「長松、なんせ旦那様はお留守るすだから奥様にそう申し上げて来
な、青梅在のお百姓さんが、本町の彦三郎さんのお娘御をお連
れ申してお目にかかりたいと申しておりますつて、ね、いいか」

「は——い」

小僧は氣のない返事をして奥の方へ行きました。

「まあお掛け……」

番頭が月並の愛想で火鉢を出すのをきっかけに、七兵衛は店
先へ腰を下ろして、煙草をぷかりぷかりやりながら落着いてい
るうちにも、お松はなんとなくおどおどした様子で、七兵衛のか
げに小さくなっていると、さいぜんの小僧が出て来て突っ立つ

たなり、不愛想ぶあいそうきわ極まる面付かおつきをしながら、

「番頭さん、お内儀かみさんのおつしやるにはねえ、本町の刀屋さんなんてのは聞いたことも見たこともないつて。だからそのお娘さんなんて方には近づきがないから、どうかお帰りなすつて下さるように、そう申し上げて下さいと」

これを聞いた七兵衛とお松はハツと面を見合せましたが、お松が進み出でて、

「そんなはずはないのよ」

面を真赤にして眼は潤うるみきつて、

「そんなはずはありませんよ、こちらのお内儀かみさんは、わたしのお母さんの姉さんだもの、面を見ればわかるのよ」

お松は精一杯せいいつぱいにこのことを主張します。番頭と小僧はさげすむような面をして二人を見ていますのを七兵衛は、

「この娘さんもあのように申します、奥様に一度お目にかかれ
ばすぐおわかりになりましたよう」

「だって、お内儀さんが知らないとおつしやるものを仕方がな
いじゃないか」

小僧は口を尖^{とが}らします。

「伯母さんに会えばすぐわかるのよ、小さい時お芝居へ連れて
行っていたいたこともあるのだもの」

七兵衛はお松の説明のあとをついで、やはり律儀^{りちぎ}な百姓の口調^{くちよう}
で、

「実は、このお娘御とおじいさんとが甲州裏街道の大菩薩峠と
申しますところでお難儀をなすつていらっしゃるのを、私が通り
かかつてお連れ申したわけで、このお娘さんも頼^{たよ}る方^{かた}といつて
は、こちら様ばかりだそうで、いかにもお気の毒ですから御一

緒にやつて参りましたわけで、どうかもう一度、奥様にお取次を願います」

克明こくめいに頭を下げ、頼むので、番頭は飛んだ厄介者やっかいものと言わぬばかりに小僧あごに顚あごを向け、

「では、モ一遍お内儀さんにそのことを申し上げてみな」

小僧ふしようぶしようは不承不承にまた奥へ行きましたが、小さな紙包を一つ持つて出て来て、

「番頭さん、何と言つても奥様は御存じがないとおつしやる、これは少ないが草鞋わらじ銭だから、それを持つて帰つてもらうように、足りなければまだ一両や二両はそちらで心配して上げてもいいからつて」

番頭はその紙包を受取つて七兵衛の前へ進み出で、
「幾度お取次してもお聞きなざる通りでございます、これはホ

ンの草鞋錢の印で、これを持つてお帰り下さい」

紙包を七兵衛の前へ突き出すと、七兵衛はグツと癩癩にこたえたのを、だまって抑えつけて紙包を見詰めたままでいると、お松は横を向いて口惜しさに震えます。このときちょうど、「いらつしやい、お掛けなさい」

小僧たちの雷のような喚きに迎えられて、この店へ入つて来たのは切下げ髪に被布の年増、ちよつと見れば大名か旗本の後家のようで、よく見れば町家の出らしい婀娜なところがあつて、年は二十八九でありましょうか、手には秋草の束にしたのを持つておりましたが、

「あの、この間の柄をもう一度見せて下さいな」

「これはこれはお師匠様、わざわざお運びで恐れ入ります、昨日織元から新柄が届きまして、ただいま持つて上ろうと存じて

おりましたところで、へえ、この通り」

番頭小僧もろともにペコペコお低頭じぎをして、棚から盛んに反物たんものを担かつぎ出して切髪の女の前に罫とりでを築き立てると、

「ついであつたものだから」

女は鷹揚おうようにその反物を取り上げて、柄を打返して調べはじめますと、

「おい、番頭さん、こりや何だい！」

閑却かんきやくされていた七兵衛はここで紙包をポンと突き返して、呼びかけた声がズンと鋭かつたので、切髪の女はひよいと振返つて七兵衛を見ます。かまいつけなかつた番頭小僧どもは、七兵衛の鋭い権幕けんまくを見てゾツとする。

「お錢あしをいただきますにあがつたわけじゃござんせん、番頭さん、悪い推量でございます」

七兵衛は煙管きせるをポンと叩いて、

「御当家の御親類のお娘子むすめごをお連れ申したただけのことで、それを強請ゆすりかなんぞのように銭金ぜにかねで追っ払いなぞは恐れ入ります」

そろそろ七兵衛の言い分が巽上りたつみあがになつて、悪くとれば妙にこだわつて、いよいよ悪く見えますから番頭小僧も不安の色を見せていると、七兵衛は、

「お金が欲しいのでお邪魔に上つたように取られては私も残念でござえますから、念のためにこの子の死んだお爺さんというのから、お預かり申した金をここでお目にかけます」

といつて七兵衛は小包を解いて、中から百両の包を三つ取り出して、

「これが、このお娘子のお爺さんから私が預かりましたお金でございます、ナー二、ここへ拡げなくてもよいわけでございます

すが、お金が欲しいくらいならわざわざこうして持つて参りは致しません——ところで」

七兵衛が存外おとなしくて、

「せっかくこうして親類の名乗りをして尋ねて来たものを畳の上へもお通しなされず、見ず知らずとおつしやつて追い出すお家へ、御無理にお願い申してこの娘さんを置いて帰りましたところで行く末が案じられます。こうやつてお連れ申してみればマンザラ他人のような気も致しませんから、よろしゅうございます、御当家に縁のないものなら私に縁のあるものでござえましょう、今日から私が貰い受けましょう、どうかあとあとのところを苦情のねえように」

こういつて七兵衛は煙管きせるを筒の中に納めて、お松を顧み、

「なあお松坊、そういうわけだから、ここはおじさんと帰るさ」

三百両の金を蔵^{しま}つて立ち上ろうとする。お松は情けない面^{かお}をして、眼にはいっぱいの涙を含んで、小さな顎^{あご}を襟^{えり}にうずめて頷^{うなず}きます。

夏の夕風がうすら淋^{さび}しい。二人が出て行くと、まもなく山岡屋の番頭小僧らはドーツと笑いました。この笑い声を聞いた時、お松は屹^{きつ}と振返つて山岡屋の暖簾^{のれん}を睨^{にら}みつけ、暫く立去れない口惜^{くや}しさが胸までこみ上げて来るように見えたが、「お江戸は広いから居どころに困るようなことはねえ」七兵衛はお松を促^{うなが}して連れて行く。

十七

二人が神田明神の方へ曲ろうとすると、後ろから呼びかける

ものがあります。

「もしもしあの、お爺さんとつにお娘さん」

あたりにあんまり人通りがなかったから直ぐに気がついて二人が振返ると、それはさいぜん、同じ店に反物の柄を見ていた切髪の女でありました。切髪の女は二人に近寄つて人懐ひとなつこく、

「あの、無躰ぶしつけながらお前さんは山岡屋の御親類なそうな」

「はい、左様さようでございます、この子が山岡屋の御親類で。私は縁もゆかりもない百姓でございますが」

「そう、わたしもあの店でちよいとお聞き申しました、それでお前さん方がお困りのようだから、だしぬけに声をかけてみましたの」

品のよいわりに口の利ききようが慣れ過ぎた女だと思つて、七兵衛は、

「左様でございましたか……」

「わたしはね」

女はちよいと横の方を向いて、

「ついそこの横町に住んでいます者、こんなところで申し上げては失礼ですが、もしなんならそのお娘さんを、わたしがお預かり申し上げても苦しゅうござんせぬ」

「へえ、そりや御親切に……」

七兵衛も、あまり変った救い舟が靄もやの中から不意に飛び出して乗せて上げようというのだから聊いささか面喰めんくらつて、

「御親切は有難う存じますが、見ず知らずのあなた様にお縋すがり申しては何が何でもあまりぞんざいでございますから」

「いいえ、ぞんざい、というのはわたしの言うことよ。世間は妙なもので、お前さんのさつきお言いなさる通り、親類呼ばわりを

して来たものを門口かどぐちから追い返すものもあれば、赤の他人でもずいぶん因縁いんねんづくで力にもなったりなられたりするものもあります。ほかにどこぞ頼る所でもおありなされれば格別、そうでなかつたら、ちやうど私の家が手不足で困っておりますから……」

世間にはなかなか世話好きの女もあるものだと思つて、七兵衛がまだ返答もしきらないうちに、女は先に立つて、

「まあまあ、わたしの家へお寄りなさい、どちらに致せ今晚はお泊りなすつておいで、ナニ、氣遣きづかいなものは一人もおりませんよ」

「それでは、せつかくの御親切に甘えまして」

七兵衛とお松は煙けむに捲かれて、あとをついて行くと、湯島の

高台に近い妻恋坂つまこいざかの西に外れた裏はすのところ、三間間口さんげんまぐちを二間の

黒塀くろべいで、一間のあいだはくぐりの格子こうしで、塀の中には見越みこしの松

から二階の手すりなども見えて、気取った作りの家の前まで来ると女が先に格子をあけて案内した時、表にかけた松月堂古流うんぬん云々の看板で、この女がべつだん凄すじいものではなく、花の師匠であることを知りました。

「さあ、お入りなさい、ここはわたしの家で、婆ばあやと猫が一疋びきいるばかり」

十八

甲州本街道の方は、新宿から八王子まで行く間に五宿、府中、日野まで相当の宿々しゆくじゆくもありますけれど、裏街道ときてはただ茫々ぼうぼうたる武蔵野の原で、青梅までは人家らしい人家は見えないと言つてもいいくらいです。

ことにこの青梅街道の中で丸山台というところあたりは追剥おいはぎの類たぐいが常に出没して、日の中に心強い人連れうちでもなければ屈強くつきょうな男でさえ容易にここを通りません。まして日の暮や夜は無論のこと。それを今日は珍らしく、まだ有明ありあけの月が空に残っているうちに、馬の鈴の音がこの丸山台のあたりで聞えます。そして朝露あさつゆをポクポクと馬の草鞋わらしじに蹴け払はらって、笠を被かぶった一人の若い馬子まごが平気でこの丸山台を通り抜けようとしております。大方、江戸を夜前やぜんに出て近在へ帰る百姓でありましょう。それにしても大胆な。馬子でも思慮のあるものは今時分いまじぶんここを一人歩きはしないものを。それもそのはず、この若い馬子をよく見れば、かの万年橋の下の水車小屋の番人、馬鹿の与八ですもの。馬鹿ですから怖こわいもの知らずです。

馬の背中には大きな行李こうりが三つばかり鞍くらに結びつけられて、

その真中に丈三尺ばかりのお地藏様の木像、どこから持つて来たか、大分に剥はげて、錫杖しやくじようの先や如意宝珠にょいほうじゆなども少々欠けておりますが、それを馬の背の真中へキチンと据すえつけて、それを縄なわでほどよく結びつけておきますから、遠くから見ればお地藏様が馬に乗つてござるようです。

与八は手綱たづなを引張りながら、時々後ろを顧みて地藏様を打仰ぎ、

「はア、地藏様ござらつしやるな」
と声をかけて進んで行きます。

「俺わしは子供の時分、なんでもこの街道へ打棄うつちやられたのを大先生おおせんせいが拾ひろつて下すつたとなあ。俺の親というのはどんな人だんべえ、俺だつてまんざら木の股またや岩の間から生れたじやあるめえから、親というものがあつたには違えねえ、大概たいがいの人に父ちやんというもの

とおつ母かあというものがあるだが、俺にはホントウの父とおつ母が無え、だから俺あ人にばかにされる、なに、ばかにされたつてかまやしねえや、大先生が大事にしてくれるから不自由はねえけれども、それでも一ぺんホントウの父というものとおつ母というものに会いてえな——海蔵寺の方丈様のおつしやるには、地蔵様というものは親なし子を大事にして下さる仏様だとよ、地獄へ行つても地蔵様が我を頼めとおつしやつて子供を助けて下さるくらいだから、地蔵様を信心しんじんしていれば自然と親たちにもめぐり会えるだからと、方丈様がそうおつしやるものだから、俺あ地蔵様を信心して、道傍みちばたに石の地蔵様が倒れてござらつしやれば起して通る、花があれば花、水があれば水を上げて信心するだ……昨日も四谷よつやの道具屋に、このお地蔵様の木像があつたから、いくらだと聞くと一貫二百で売るといふから、小遣こづけえをぶ

ちまけて買つて来た——これを持って帰つて家で毎日信心をす
る」

与八はこんな独言をいつて歩きます。

「俺もひとりぼっちだあけれど、うちの大先生も運の悪い人だ、
五年も六年も御病気で、体が利きなさらねえ、たつた一人の若
先生はあの大試合の日から行方知れずになつておしめえなさる
し——今は親類の衆が寄つて世話をしてござらつしやるが、や
はり親身しんみの人が恋しかんべえ……」

与八の独言は涙まじりになつてきます。

「そりやそのはずだあ、俺だつて何不自由はねえけれども、それ
でも親身の親たちに会いてえと思わねえ日はねえくらいだ、大
先生はああやつて竜之助様を勘当かんどうしておしめえなすつて、誰が
何といつても許すとおつしやらねえが、でも腹の中では若先生

がいたらと思うこともあるに違えねえ……：…いたいが竜之助様
という人が心得違えた、たとえば勘当されたとして、たった一人の
おやこ
親御じゃねえか、それを慕つて帰つてござらねえというのが嘘
だ、俺、ふだんから若先生という人は気味の悪い人だと思つて
いた、剣術なんというものは身の守りにさえなればよかんべえ
に、若先生は人を斬ることを何とも思わつしやらねえだ——い
くら剣術でもああいふ法というのはあるめえ、かりにも御主人
を悪くいって済まねえけど、あの分で行ったら竜之助という
人は決していい死によろはなさねえ、もしや江戸にござらつ
しやるかと昨日も一昨日も探して歩いたが、お江戸だつて広い
や、なかなか見つかりやしねえ、見つけたら意見をして引張つ
て来べえと思つたが駄目なこんだ」

与八はしきりなく独言をつづけましたが、この時また地藏様

を振返つて、

「まあいいや、大先生の分も若先生の分もおらが分も一緒に、このお地藏様に信心をしておくべえ……」

独言が途絶えて、馬のポクポクと歩く音が林の中へひっそりと響いて行く。

ややあつて与八はまた独言です。

「それからわからねえのがあのお浜という女よ、若先生から頼まれて水車小屋へ担いで来た、俺あの時のことを思うとゾツとする、今まであんな悪いことをした覚えはねえ……それにあの女が若先生に文を届けてくれると、あの試合の日、おらがところへそつと持つて来た、どうも、あの女がおらがには解せねえ女だ」

こう言っているうちに与八と馬とは丸山台の難所を三分の一

ほど通り過ぎて、行手の木蔭こかげに焚火たきびでもあろうか火の光を認めました。

「やあ、火が燃えてるな」

与八は何の気なく手綱たづなを取って行くと、その火のあたりで物騒ものさわがしい人声です。

「朝っぱらから人声がするな」

近づいて行くにしたがつて人声はますます喧しいので、

「黙って歩いたらよかんべえ、まるで喧嘩けんかみたような、でけえ声をして」

ポクポク進んで行くと、行手に数個の人影があつて、ぐるりと輪形わがたに突つ立ち、中に一人の人を囲んで棒を持ったり杖を持ったり、そして盛んに啖呵たんかを切つて中なる人を脅迫きようはくしている様子です。

「お前たちは何してるだあ」

丸山台へは悪者が出るのがあたりまえで、出ないのが不思議なくらいですから、その心得のあるものなら早く逃げのびる工夫くふうをすべきはずですけれども、そこは馬鹿のことですから五六人の悪者の中へ、ぬつと首を突き出してしまいました。

「何だ何だ、手前はてめえ」

悪者の方がかえって驚きます。

「朝っぱらから賭博ばくちでもしてるのかと思えば、この小さい人を捉つかめえて小言こごとを言っているのかい」

極めての大胆と全くの無神経とは時によって一致します。

「馬鹿だ、こいつは」

「叩きなぐつちまえ」

悪者と見えるのは、やはりこの辺を飛び廻る下級の長脇差ながわきざし、

胡麻ごまの蠅はえもやれば追剥おいはぎも稼かせごうという程度の連中で、今、中に取捲ふうさいいて脅おどしているのは、これは十二三になる侍さむらいの子と覚おぼしき風采で、道のまん中に坐り込んだまま、刀の柄つかに手をかけて寄らば斬らんと身構えてはいるが、見たところ疲れきつて痛々しいばかりです。

「ああわかった、お前たちはなんだな、この子を捉つかめえて追剥をすべえというのだな。そんならよした方がいい、人の物を取るのにはよくねえだからな」

悪者どもは吹き出したくなるくらいです。何となれば間まの抜けた面つらをこの難場なんばへぬつと突き出して、後ろを見れば地藏様が馬上ゆたかに立たせ給うのである、ばかばかしくて喧嘩にもならない。

「さきほどより申す通り、わしは大事を控えた身なれば、ここ

にありたけの金子きんすをそちたちに遣つかわすゆえ見のがせと事を分けて申すに、強たつて衣類腰の物まで欲しいとならば是非もないから刀を抜く」

少年は坐りながら、涙ぐんだ眼に彼等を睨にらめてキツパリと言う。

「その大小が金目かねめと睨んだのだ、たかの知れたお前たちの小遣錢なんぞに目はくれねえ。よ、痛い目をしねえうちに投げ出しちめえねえ。お前がいくら光るものをひねくつたつて、こつちは甲州筋で鳴らした兄にいさんたち五人のお揃お揃いだ、素直すなおに渡して鼻でも拭いて行きねえ」

手に持った棒を少年の頭の上で振る、一人は手を伸ばして少年の抱えた刀を奪い取ろうと、うつむいた浮腰うきこしを横の方から、ひよいと突き飛ばしたのが与八です。

「よくねえことをしやがる」

悪者の一人は茄子なすをころがしたようにのめると、

「この野郎」

馬鹿と見た馬方が意外の腕立て。

十九

与八の力は底知れずですから、悪者どもを手もなく追い払つてしまいました。

それから与八は少年の傍そばへ寄つて来て、

「どうだお前様、あぶねえところだったな」

「おかげで助かりました、お礼を申します」

「お前様一人で来なすつたのかえ」

「一人で」

「どこから」

「江戸から……」

「お江戸から……そうしてどこへ行きなさるだ」

「青梅の先まで」

「青梅の先……俺も青梅の方へ行くだ、一緒に行くべえ」

「それでは……」

少年は坐つていたのを、刀を杖つえに立ち上ろうとしたが、よろよろと足が定まりませぬ。そのはず、今朝江戸を出て来たものとすれば、子供の足で七里の道、足が腫はれ上つて動けないらしい、そこを悪者どもに脅おびされたものと見えます。それでも我慢がまんして、痛いとも疲れたともいわず、与八と連れ立って歩こうとする、その痛々しさは与八も気がつかずにはいられなかったの

で、

「お前様、足が大分草臥くたびれたようだなあ、待てよ……」

与八は馬の背中を見上げて、首を傾かたげることしばし、

「こうと、荷物はいくらでもねえが、地蔵様を横つちよの方へお廻し申しては勿もつ体ないし——お地蔵様と相乗りというわけにもゆくめえし」

腕を組んでお地蔵様と首つ引きに頻しきりに考えていましたが、

「おおそうだ、そうだ」

にわかに両手を拍うつて、馬に近寄つて、背中に安置した地蔵

尊の木像を怖おそる怖る取り下ろし、それを有合せの細帯で後ろへ

廻し、子供をおぶうと同じことに自分の背中へ結びつけて、

「これでよし、さあお前様、この馬へ乗つておいでなさい、なに、遠慮しなくてもいいだ、その足で歩けるもんでねえ」

少年は心から有難そうに、すすめられるままに馬上に跨またがります。

与八はお地藏様をおぶったまま、手綱を取り上げて馬を引きだす。その恰好かつこうのおかしさ。それでも当人はいつこう平気で、「お前様はお侍様の子供のようだが、青梅はどこまでござらしやるかね」

朝の靄もやがすっかり晴れて、雲雀ひばりは高く舞い、林から畑、畑から遠く農家の屋根、それから木々の絶え間には、試合のあつた御岳山あたりの山々が、いま眠りから醒さめたように遙々ようようとして見え渡ります。

「和田というところへ行きます」

「和田へ……」

「和田の宇津木というところまで」

「和田の宇津木様？」

与八は歩きながら、思わず少年の面を見上げて、

「宇津木様へ……そりやお前様の御親類でもあるのかえ」

「宇津木は、わしの実家じゃ」

「お前様の実家……それではお前様は、文之丞様の弟さんかえ」

「弟の兵馬ひょうまという者です」

「ああそうでございましたかい、そうとはちつとも知らなかつた」

この少年こそ、宇津本文之丞の実の弟の兵馬であつたのです。

兵馬は幼少の頃から番町の旗本の片柳かたやなぎという叔父の家に預け

られていたのが、このたびの変を聞くと無分別に叔父の家を脱

け出して兄の家へ帰ろうとして、ここまで飛んで来て、疲れ切つ

たところを、悪者に脅おびされたものでありました。

宇津木兵馬と聞いて馬子が驚きの意味ありげなのを見て、

「馬子どの、お前もあちらの人か」

「エエわしも」

といったが与八はポキリと言葉の端^{はし}を折って、一丁ほどは物を

言いませんでした。兵馬も再び尋ねなかつたが、やがて与八は、

「お前様のお兄様の文之丞様というお方も、運の悪いお人だ」

「兄上のことを御承知か」

「はあ、よく知ってますだ」

「そんなら机竜之助のことも」

「はあ、その竜之助様のことも」

「してみれば、五月五日の試合のことも知ってであろうがな」

「はあ、その事もあの事もみんなよく知ってますだが……」

「そうか、それは幸い。あの試合で兄上と竜之助の勝負は」

兵馬の意気込むにつれて与八はしよげ返り、

「あの勝負は竜之助様が勝つて文之丞様が負けた」

「尋常の勝負ではなかったはず」

「尋常の勝負どころか、お前様、飛んでもねえ勝負でござんす、お前様のお兄様のことだからずいぶん腹も立つべえけれど、俺も悲しいやら口惜くやしいやら……」

与八は泣き出してしまいました。

「なにも泣くことはあるまい、お前の身にはかかり合いのないことだ」

「わしにかかり合いのねえどころか、大有りでさあ」

「お前に……あの試合が？」

「何も言わねえ、試合のことなんざあ忘れちまつた方がよかんべえ」

「それが忘れられるものか、それがためにわしは江戸を抜け出して兄上の仇討あだうちに出て来たのだものを」

「お前様が仇討に——誰を敵かたきにお討ちなさるだ」

「机竜之助を」

「机竜之助様を？」

与八が振向いた時、馬上の兵馬は御岳山の方を見やる眼許めもとより雫しずくが頬を伝うて流れるのを見かけます。

二十

七兵衛とお松とを店頭みせさきから追ひ払ったその晩のことです。

主人は商用で上方かみがたへ行つたというにもかかわらず、山岡屋の

女房のお滝は、ニヤけた若い男を傍に置いて、夜も大分更ふけて

ゆくのにしきりに酒を飲んでいと、

「あ、人の足音」

「猫でも来たのだろうよ」

「でも、今のはたしかに人の足音でございましたよ」

「度胸のない人だねえ、そんなにおどおどしてき。あけてごらん」

「おや」

そこにはまさしく人が立っていたので、

「あれ、お前さんは誰だえ」

「誰でもございません、さきほど店前みせさきで追っ払いを食いました

百姓で……」

「ええ！」

「まず御免なせえまし」

そこへ入り込んで、どつかと胡坐あぐらをかい、黒い頭巾ずきんを投げ出したのは、なるほど裏宿うらしゆくの七兵衛でありました。

七兵衛は懷ろふとこへ手を入れて、短刀を出して、刃先を前に向けてブツリと畳へ突き通します。

「お、お金がお入用いりようならいくらでも差上げますから——どうぞ——どうぞ命ばかりは……」

「お内儀かみさん、お前さんはよく金々と言いなさる、さきほども大枚のお金をわっしに下すつたが、その時も申し上げた通り、金が欲しくつて上つたわけじゃござんせん」

「そんなら品物を何でも、好きな物をお持ちなすつて……ただいま土蔵へ案内を致させますから」

「くどいやい、今夜は盗みに来たんじゃないやねえ」

お滝は慄ふるえ上りながら、やつと気がついたらしく、

「ああ、わかりました、わかりました。さつきお話の本町の彦三郎の娘のこと、つい小僧から又聞きでございまして、まことに失礼を致しました。たしかにわたくしの姪めいに相違さつそくございません……よく——よくお連れ下さいました、早速手前どもで引取りまして、実の子のようにしてお育て申します、どうかそれにて御勘弁を。はい、小僧めがいいかげんなことを申しますので、ついどうも飛んだ失礼を申しました……」

「遅いやい遅いやい、いまさら夜迷言よまいごとをぬかすな、あの子はあととの苦情のねえように、よく念を押しておれが貰もれえ受けたんだ、お前めいたちに縁もゆかりもねえ」

「それでは養育料としまして」

「馬鹿め、縁もゆかりもねえものに養育料が要いるか」

「どうぞ命ばかりはお助け——」

「命まで取ろうとは言わねえ」

「それでは命をお助け下さる……」

「命は助けてやるめえものでもねえが、ただじゃ帰れねえ」

「それではお金を……」

「金は要らねえ」

「では……」

お滝は絶体絶命の体ていを、七兵衛は冷ひややかに笑つて、

「山岡屋のお内儀さん、わつしはほかに望みはねえ、お前さんに恥をかかしに來た」

「恥を……」

お滝は唇の色まで真蒼まつさおになつたのを、七兵衛は心地ここちよげに、

「そんなに驚くことはねえ、恥と言つたつて、なにもお前さんなぐさものを弄み物にするわけじゃねえのだ、おれは子供の時分から虫の

せいで、善い事にしろ悪い事にしろ仕返しをしなくつちやあ納おさまらねえ性分しょうぶんだ、それでさきほどのお札にやつて来たわけだが——
——実はお内儀さん、少し手荒いかも知れねえが、お前さんを裸はだかにして……」

「えッ？」

「お前さんに裸になつてもらつて、それをわつしが痛くねえように縛さつつて上げるから、それでもつてお内儀さん、先刻さつわつしがお松と一緒に抛ほうり出されたお店の先へ明日の朝まで辛抱しんぼうして立つていてもらうんだ。いいかえ、暁方あけがたになつたら人も通るだろう、そうなるといいお内儀さんが素裸すっぱだかで立っているのを見過みごしもできめえから、何とかして上げるだろう、お淋さびしくもあろうが暫しばしの辛抱だ、幸いここに二歳にさいがいる、こいつをお伽とぎに……」

「お助け下さい——」

二人は声を合せて号泣する——そのあとはお滝がひいひいと悶えもだころ転ぶ音。

七兵衛は変った盗賊です。

この物語の最初以来、甲州から武州、ならびに関八州を荒し廻った盗賊というのは大方はこの七兵衛の仕業しわざでした。

七兵衛は盗みの天才で、子供のうちからすでに大人の舌を捲まかしたものです。

十か十一の頃でもあつたらう、同じ青梅の宿しゆくの名主なぬしの家に雇われていた時分、主人の物をはじめ近所あたりの物をちよいちよい盗みます、盗んでどうするかといえ、直ぐにそれをほかの子供らにやっってしまう。親たちが見つけてこれは誰に貰ったと聞けば、七ちゃんに貰ったと答える。それから七兵衛の泥棒根

性と、その手腕はようやく世間の認めるところとなつて問題になりかけた時に、主人が七兵衛を呼びつけて、

「お前はよくねえ癖がある、今のうちは子供で済むが年を取るとそうはいかぬ、その癖をやめろ、やめねえけりやこの家を逐おい出すからそう思え」

「旦那様、俺おいらは何か見ると盗みたくなつてたまらねえ、盗んでしまえば気が済みます、だからみんな子供にやつちめえます、悪い気で盗むじゃねえから、どうか堪忍かんにんして下さい」

「あきれた野郎だ、悪い気でなく、善い気で盗まれてたまるものか——よし、それほど盗みたいなら七公」

主人は言葉を改めて、

「今夜おれの座敷へ忍んで来て、俺の膝元ひざもとへ金包を置くから、それを盗んでみろ、もし見つけたら俺がこの刀で叩き切つちまう

がどうだ」

こう言われて七兵衛はかえつて平氣、

「いいとも旦那、明け方までにはきつと盗んで見せませう」

「生意気なことを言う奴だ——いいか、盗み損ねたらホントに命はないぞ」

名主は苗字みょうじ帯刀御免の人だから、切つてしまうというのはことによると嘘うそではあるまい。

「もし首尾よく盗んだら旦那様、どうしてくれませう」

逆捻さかねじを喰わす口ぶりに、主人もあいた口が塞ふさがらず、

「その時は勝手にしろ」

「そんなら勝手に泥棒してもいいか」

「馬鹿！ どうでも今夜は切つちまうからそのつもりで来い」

主人はその晩、一包みの金を自分の膝のところへ置いて、長

い刀の鞘さやを払い、七兵衛が来たら切らぬまでもこれで嚇おどしつけて、その手癖を直してやろうと、燈火あかりの下へ右の白刃しらばを置いて、机を持つて来て夜長のつれづれに書物を読み出していました。なかなか七兵衛は来ない。

「やつめ、怖こわくなりやがつたな」

と主人も微笑していましたが、やがて一番鶏いちばんどりが鳴きました。

ふと見れば、膝元に置いた金の包がない。

「はて」

主人はびっくりして、机の下、行燈あんどんの蔭、衣服きものの裾すそまで振つて見たけれど、差置いた金包は更に見えません。

「ああ盗やられた」

急いで人を起して、

「七兵衛はいないか、七兵衛はどこへ行つた」

どこへ行つたやら影も形も見えないので、主人は中つ腹ちゆうばらで、それから日のカンカンさすまで寝込んでしまうと、

「旦那様、七兵衛が見えました」

「ここへ連れて来い」

主人の寢床の前へ七兵衛は平気な面かおでやって来て、

「旦那様、お土産みやげを買つて来ました」

とて経木きようぎの皮に包んだ饅頭まんじゅうを差出しました。呆氣あつけに取られた主

人が、

「七兵衛、お前は昨夜どこへ行つた」

噛かみつくように怒鳴どなるのを七兵衛は抜からず、

「旦那様からお金をいただいたから、欲しいと思つていた網とウケ（魚を捕る道具）を買いに八王子まで行つて来ました」

「八王子へ？」

主人が眼を白黒しろくろしたのも道理で、八王子までは六里からあります。昨夜いつごろ金を盗んだかわからないが、それから往復十二里の道を子供のくせに平気で歩いて来たと聞いただけで、胆きもをつぶす価値ねうちが充分あるのです。

「こういう奴は末が怖ろしい、勝手に出て行け」

それで主人の家をお払い箱はらばこになつてしまいました。

それからの七兵衛は自分の家へ帰つてコツコツと少しの畑を耕したり、賃雇いに出たりして暮していたが、その後、世話をする者があつて隣村から嫁よめを貰つた、この嫁が尻の軽い女で、初めから男があつたとかになかつたとかいう者もあつたが、ようよう一人の男の子を生むと、女房の姿が見えなくなつた、近所の人かけおちは男と駈落をしたものだろうと言つています。

子供を一人残されて女房に逃げられた時は、七兵衛も大分弱つ

たようでしたが、その後、子供は里へ預けて来たと言つて、それからは一人で暮して、昼は山稼やまかせぎ畑稼やまかせぎをして、夜になつては大概早く戸を締めて人とも交際しません。七兵衛は固くなつた固くなり過ぎたと、人々は評判をしておりましたけれど、実はこの時分から、持つて生れた泥棒癖どろぼうへきが再び萌きざしはじめたものです。

昼のうちは克明こくめいに働いて、夜分になると戸を締め切つておいて盗みに出かけます。盗みは決して近いところではしない、上州とか甲州とか数十里を隔てたところへ行つては盗んで来て、その曉方あけがたまでに青梅へ帰つて、昼はまたなにくわぬ面で山稼やまかせぎ畑打ちです。それで盗んだ金は名も現わさず散らしてしまふ、女狂い賭博ばくち狂いばくちぐるをするでもなければ身の廻りを飾るでもないから、誰も怪あやしむものがない、それでいよいよ捕われるまでは七兵

衛の大罪を知るものはなかったわけです。

二十一

竜之助の父弾正だんじょうの枕元に、宇津木兵馬と与八とが坐っており
ます。

「兵馬殿、せっかく剣術を修行なさるなら正しい剣術を修行な
されよ」

弾正は言葉を改めてこう言い出しました。

憎い敵かたきの家、竜之助の父、兵馬はこう思い込んで来たものの、
事実、弾正に会って見れば、その病氣まじこころに対する同情と、寸分の
隔へだてなく慈愛を以て自分を訓戒する真心に動かされてしまった
のです。それで神妙に膝に手を置いて弾正の言うところを聞い

ていると、

「あの竜之助がよい見せしめ、あれも初めは見込みのある剣術であつた、わしも最初のうちは欣よろこんでいたが、わしが病氣になつて以来、すっかり術が墮おちてしまつたでな」

「術が墮ちたとおつしやるのは」

「何も知らぬ者は竜之助がメキメキ腕を上げたと評判するげな。わしが眼で見れば日増しに術が墮ちてゆく。ああ残念な、この身が丈夫であつたらあの腕を叩たたき直してやろうものと思わぬ日はなかつたが、何を言うにもこの不自由で、みすみす倅せがれを邪道に落した」

弾正の眼からは竜之助の剣術の進歩を進歩と見ないので、

「あのような剣術が今日こんにちの仕儀しぎになるは眼に見えたものじゃ、わしはもう世に望みのない身体からだ、兵馬殿、どうか拙者になり代つ

て竜之助を懲らして下さい」

弾正は疲れを休めて後、

「とは言え、今の其許そこもとでは、いかに心が逸はやつても竜之助の向うに立つことはおぼつかない、ようござるか、修行が肝腎かんじんじゃ」

「修行します、立派に修行しませいでか」

「ああよいお覚悟じゃ。時に、正しい修行には正しい師匠を取らねばならぬ……わしがその正しい剣道の師匠を其許すいせんに推薦する、その人について修行なさるがよい」

弾正が推薦する正しき剣道の師とは何者か。

「下谷おからまちの御徒町に島田虎之助という先生がある、流儀は直心陰拙者が若いうちからの懇意こんいで、今でも折々は消息たよりをする、この人はまさに剣道の師たるべき達人じゃ」

「島田虎之助先生、お名前も承わったように覚えまする」

「上泉伊勢守の正統を伝えたものは当代にこの人であろう」

己おのれが子竜之助の剣道を邪道のしと罵るにひきかえて、島田虎之

助を弾正が推薦することは極度であります。

「正しい代りに修行が厳きびしい——厳しい修行で弟子が少ない、

みようもん

もと名聞を好む性質でないから世間からは多く知られていないが、わしとは若い頃から気が合あうてよく交まじわった——せつかく剣道を学ぶならこの人に就いて学びなされ」

弾正の話の中には、別におのずから見識があつて、兵馬にはよくわからないながら、この老人が尋常の人と思えない、もしこんな病気にかからないならば、どんなエライ人になつたろうかと、そぞろに尊敬の心を起させるようです。

「今日は五月のお節句ですねえ」

障子を少しあけて、初夏の清々^{すがすが}しい日光と風とを入れ、その膝のところ^はに、ようやく這^はうばかりになつた男の子を遊ばせて、自分はその子の単衣^{ひとえ}を縫^{ひそ}っている若い女房は、ちよつと眉根^{まゆね}を顰^{ひそ}めて男の方を見やりました。

「四年目の五月の節句じゃな」

見台^{けんだい}を前にして何かを読んでいた男の人は、女房の話しかけたのをこう受けてちらと見向きますと、余念なく衣^{きもの}を縫うている女房の襟元^{えりもと}のあたりが見えます。

「来年もお山に試合がございましょうねえ」

「ある」

「どなたが勝ちましょう」

「誰が勝つか」

「お前様このごろは根っから試合をあそばしませぬ……」

「ひかげもの日蔭者の身ではなあ」

こういつて男がなんとなく深く歎息をした時に、女は針の手をとどめて、

「ほんとにもう、日蔭者になつてしまいましたわねえ」

男の面をかお見て淋しく笑います。

「いつまでもこうしてはおれぬ」

男の所在つふやなげに呟く時、女は持っていた縫物を投げ出して、

「坊や、抱だつこをおし」

膝にまつわる可愛らしい男の子を抱き上げて、

「ほんにお前様のお腕なら、この広い江戸表へ道場を開きなされても立派に師範で通ろうものを……こうしていつまでも日蔭

者同様の身ではねえ」

「いまさら愚痴ぐちを言つても追つつかぬ、みんな身から出た錆さびじゃ」

「でもお前様……」

女は子を抱いたなり男の方へ膝を向け、

「私たちは日蔭者でも、この子だけはねえ」

「うむ——」

男は俯向うつむいて物を考えている様子です。

「この子のために何とかして下さいな、わたしはどうなつても構かまいせんけれど、坊やだけは世に出したいと思ひますわ」

「それはお前に言われるまでもない」

男は少しく癩癩かんしゃくに触つたらしく、

「よく日蔭者日蔭者とお前は口癖くちぐせに言うが、日蔭者の拙者とい
るがいやになつたか」

「どうしてまあ——」

女は怨めし^{うら}そうに男の横顔を見つめて、

「こうして四年越し、晴々^{はればれ}と明るい世間へ出たこともなし、御

近所のお内儀^{かみ}さんたちが、やれ花見のお芝居のと誘つて下すつ

ても、ついぞ一日お仲間入りをしたこともないし、それという

も、みんなお前さんへの心中^{しんじゅうだ}立てではありませぬか、そんなこ

とを言われるとホントにいやになつてしまふわ」

「いやになつたら花見にでも芝居にでも行け！」

男の言葉が荒くなつたので、女も気色^{けしき}ばんで、

「あれ、お前さんお怒り^{おこ}なすつたの」

男は机竜之助で、女はお浜で、子供というのは二人の中に去

年生れた郁太郎^{いくたろう}で、この三人が住んでいるのは、芝新錢座の代

官江川太郎左衛門の邸内のささやかな長屋です。

あれから四年後、二人の生活はこんなふうに変化して、いわゆる日蔭者のその日の暮しは、江川邸内の足輕らに竜之助が剣術の一手を教えるのと、邸内を守ることによつて支えられているわけです。

「ほんとにつまらない」

お浜は郁太郎を抱きながら投げ出したような溜息ためいきです。

「何がつまらない」

「なんですか、しみじみ世の中が詰つまらなくなりましたわ」

「屁にでもなれ」

「ほんとに儘ままになるならば比丘尼びくにか巡礼にでもなりたい……」

竜之助は苦にがり切つて、その面かおには負けず根性の中に抑おさえ難い

鬱屈うつくつみなぎが漲ふっている、それを無理に抑おさえつけて、半ば不貞返ふてかえった

気味のお浜の言い分を黙もくつて聞き流ながしているが、折しにふれて夫

婦の間には、こんな不愉快な空気がこの二三年來漂^{ただよ}うて、今日はその雲行きがいつもよりは陰^{けわ}しいのです。

「ねえ坊や、お前さえなければお母さんはどこへでも行けるのだよ、坊やのお父様という人はねえ、お母さんに尼になれだとか、お父さまに愛想^{あいそ}を尽かされても、坊やがあるためにお母さんは何とも口答えができないし、出て行くところもないのだよ」
お浜は郁太郎の面をじつと見つめながら、

「今日は五月の五日といって、男の子のお祝いの日なのよ、坊やも初子^{ういご}だからお父さんに祝っておもらい、幟^{のぼり}を立てておもらい。お母さんは器量がないから人形一つ買って上げることとはできないのだよ」

竜之助は横を向いて取合わないでいるのを、お浜は畳みかけ
て、

「お節句のお祝いができないから、仏様に線香でも上げましょうねえ坊や、四年前の今日死んだ文之丞という人にお線香を上げてやりましょう、坊やは悪い月星つきほしの下に生れたねえ」

こう言いながら、前に住んでいた人がこしらえておいた仏壇の方へ立つて行こうとするのを、竜之助はこらえ兼ねた気色けしきで、

「これ浜、少し待て」

「お線香を上げては悪いのですか」

「そこへ坐れ」

「はい」

「お前は了見りようけんの悪い女じゃ」

「はい、もとより悪い女でござんす、悪い女なればこそこうしてみじめな……」

「身を誤ったはお前ばかりではない、この机竜之助もお前のた

めに身を誤った、所詮しよせん、悪縁と諦めあきらめがつかぬものか」

「悪縁……もう疾とうの昔に悪縁とは諦めておりますが」

「さあ、悪縁と思えば辛抱の仕様もある、わしもお前からさんざんの嫌味いやみを並べられ、人でないようにこき下ろされても、悪縁と思えばこそ何も言わぬ」

「悪縁なら悪縁のように少しは浮いた花やかな暮しもあるうものを、お前様と添うて四年越し、ついぞホツとした息をついたことがない」

お浜はつんと横を向いて、

「ああ、文之丞殿と添うていたら」

この一語は竜之助の堪忍かんにんの緒おをふつと切ったようです。

「浜、そういうことが今更わしの前で言えるか」

竜之助の唇がピリリと顫ふるえます。

「はい、どこでも申します、今となつてわたしは文之丞が恋しい」

「ナニ！」

「あのまま添うていたら、この子にもこんな苦勞をさせずに済もうものを」

お浜はハラハラと涙をこぼします。

「うむ——」

竜之助は憤りいきどおを腸はらわたまで送り返すために拳こぶしにまで力が入つて、

「よう、あの頃のことを考えてみい、罪はわしにあるか、ただしお前にあるか」

「さあ、水車小屋で手込てごめにした悪者は誰でしょう」

お浜は後れ毛おくげをキリリと噛かみ切つて、

「あれが悪縁のはじまり、あのことさえなくばわたしは宇津木

文之丞が妻で、この子にもこんな苦勞はさせず」

「ああ、女は魔物じゃ」

ここに至つて竜之助は女の怖るべきことを初めて悟つたかの如く、深い歎息のほかには言句ごんくも継つげなかつた有様でしたが、ややあつて独言ひとりごとのように、

「おれが方から言え、あの試合に殺氣を立てたのはみんな浜という女のなす業わざじゃ、文之丞が突いた捨身すてみの太刀先たちさきには、たしかに恋の遺恨いこんが見えていた、それを打ち返したこつちの刀にも悪女の一念が乗り移つていたに違ひない、事の行きがかりはみな浜という女の一念から起る」

「ようもまあ、そんなことが」

お浜は飛びつくように詰め寄せて、

「お前様というものがなければ文之丞は無事、わたしも無事、宇

津木の家にも机の家にも、何の騒ぎも起るまいに、それをみんなわたしのなす業とは、どうしてまあ、そんなことがお前様の口から……」

「いいや、お前という魔物のなす業に違いない」

「まあまあ、わたしが魔物！」

「宇津本文之丞を殺したも、机竜之助が男を廃^{すた}らせたも、あれもこれもみな浜、お前の仕業^{しわざ}に違いない」

「まあ、あれもこれもみなわたし？」

「それに違いない、お前の怖ろしさがいま知れた」

竜之助は騎虎の勢いで、言うだけ言つてのけるほかはなかつたので、お浜は狂乱の体^{てい}にまでのぼせ上り、

「おお、よくおつしやつた、わたしが悪魔なら、どこまでも悪魔になります」

郁太郎いくたろうを投げ出して竜之助の脇差を取るより、

「坊や、お前も死んでおくれ、わたしも」

竜之助はその手を厳きびしく抑えた。郁太郎は火のつくように泣き叫びます。

「死ぬとも生きるとも勝手にせよ」

竜之助は脇差を奪い、刀を取って腰に差し、編笠あみがさを拾ってかぶるなり縁側からふいと表へ出てしまいました。

二十三

どこをどうして来たか机竜之助は、その日、夕陽ゆうひの斜めなる頃、上野の山下から御徒町おかちまちの方を歩いていました。

ふと、鼓膜に触れた物の音で、呆然ぼうぜんと歩いていた竜之助はハ

夕と歩みを留めたのでありました。

見上ぐればそこには卑いやしからぬ構えの道場がある。その中からは戛々かつかつと響き渡る竹刀しなの音、それと大地を突き透とおす気合の叫びが、おりおり洩れて来るのです。

ああ竹刀の音、気合の声、それを忘れてよいものか。竜之助は釘付くぎづけられたように立ちつくして、そうして道場の武者窓のあたりへと近寄りました。

その道場の表札も古く黒ずんで、道場の主が果して何者であるやもよくわからなかったけれども、好きな道で我を忘れて武者窓から編笠越しにのぞき込むと、主座に坐っているのは五十九せざりやうこつぐらいの年配で、色の少し黒い、頬骨ほおぼねがやや高く、口は結んで、脊梁骨そびがしゃんと聳え、腰はどつしりと落着いて、じつと眼をつぶって、さながら定じやうに入いったように見える人物。左右に

並んだ弟子たちが十余人、いま場の真中じょうちゅうで行われつつある稽古ぶりを見ている熱心さ。

竜之助はこの緊張した道場内の空気、先生の態度、弟子の作法を見て、おのずから他の町道場と選を異ことにするものあるを知つて、はてこの道場の主は何者であろう、どれほどの手腕がある人であろうと再び主座の方を見ると、その人物がちらりと自分の方、武者窓のあたりに眼をつけたと見えた時、竜之助はなんとなくまぶしい感じがしました。

いま道場の真中で行われつつある稽古か試合か、一方はすぐだいひようれて大兵な男、一方はまだ十五六の少年。大兵の男の朱胴しゅどうはまだ新しく燃え立つばかりに見えるのが、竹刀は中段にとつて、気合は柄がらに相應してなかなか凄まじいものです。相對した少年は質素な竹の胴に、これも同じく中段に構えているが、釣合い

が妙ですから上段と下段くらいのうつりに見えます。

主人の位を見た竜之助は、この立合もまた興味を以て見はじめました。

「エーイ！」

大の男が鋭い気合と共に、

「足！」

足をねらりりゅうごうりゅううは柳剛流に限る。少年は真影流しんかげりゅうに見る人の形。

「他流試合か」

竜之助がこうつぶや呟いた時、少年はちよつと板の間を蹴けるように

して左の足はらずして、飛び込んで、

「胴！」

主座の人はなんとも合図なし。両人は分れて、またも同じく中段の構えです。

竜之助はかの大兵だひひようの男よりは、この少年に眼をつけざるを得なかつた、というのは、あとの「すくい胴」はとにかく、前の足をはずす巧妙さ、自分にも覚えがあるが、柳剛流の足は難物なんぶつで、これをはずすは一流の達人でも難しかたとするところ、それをこの少年は平然としてその足をはずして直ちに腹へ行く余裕がある。

「これは出来る」

竜之助はひとり感歎しつつ一倍の興味に誘われていると——大兵の男は上段に取つて、ウナリを生ずるほどの竹刀に押しかぶせて少年の面上へ打ち下ろす、それを左へ払つて面へ打ち返したがそれは不幸にして届かなかつた。盛り返した大兵は呼吸をはかつて突きを入れる、一歩進んでそれをはずした少年は、またしてもかいくぐつて胴、これは届いたけれども浅かつた。

ともにかくにも二本まで腹へ触^{さわ}られて大兵の男は苛^{いらだ}つて、面^{めん}籠^こ手^て、腹のきらいなく盛んな氣合で畳みかけ畳みかけ、透^{すき}間^まもなく攻め立てる。竜之助は大兵の男の荒っぽい劍術ぶりを笑^{しょう}止^しがつて見ているうちに、少年は右へ左へ前へ後ろへ、ほどよく綾^{あや}なす手練^{しゅれん}と身の軽さ。そのうちになんと隙^{すき}を見出したか、

「突き！」

細^こい、爽^{さわ}やかな少年の声は道場の板の間を矢の如く走ると見れば憐^{あわ}れむべし、大兵の男は板の間も砕くる響きを立ててそこに尻餅^{しりもち}をついて、鳥羽^{とば}絵^えにあるような恰^{かつ}好^{こう}をして見せたので、並み居る連中は吹き出しそうなのを、主座の方に氣兼ねをしてやつとの我慢です。

机竜之助は久しぶりで心地^{こころち}よい見物をしたと、その瞬間^{しゅんかん}には今朝よりの不愉快なこともすっかり忘れ去つて、少年の手並^{てなみ}の

鮮かなのに感心すると共に、自分はいかに、我が手腕うでの程はいかにという自負心ぼつねんが勃然として頭を上げ来きたつたのです。

思えば四年以前、御岳山上で試合をしたことの以来、試合らしい試合をしたことがない、日蔭者の身で平侍ひらざむらいや足輕あしがるどもを相手に腕を腐らせていたのみで、退くとも進むはずはあるまいが、さりとて世間並みの剣客や師範に劣ろうとは思わない、ここの先生はどれほどの人か知らん、とにかく今の少年と一手を争い、次にこの先生のお手うちの中を拝見するも一興であろうと、竜之助は矢も楯たてもたまらなくなりました。

二十四

改めて玄関から案内を乞うて道場内へと入りました。

主座の先生はちと、入り来る竜之助の姿を見たばかり。竜之助は門人に導かれてその人の前にひざまずき、

せつしやこと
「拙者事は江川太郎左衛門の配下にて吉田竜太郎と申す未熟者」みじゆくもの

竜之助は我が名を表向き名乗る場合には、それ以来、吉田竜太郎の名を以てします。

「拙者は島田虎之助でござる」

この一語、さすがの机竜之助をしてどうぶる胴震いをさせるほどに驚かせました。

名にし負う島田虎之助とはこの人のことであつたか、父の弾正が剣術の話といえは必ずこの人の名を呼ぶ、父の弾正は当時この人でなければ剣術はないように言う。

竜之助はその話を聞かされるごとに、一たびは冷笑し、一たびは小癪こしゃくにさわり、折あらばその虎之助なる者と立合つてみた

い、老いぼれた父の鑑識めがねを我が新鋭の手練を以て打ち砕いてやるも面白からうと、平生へいぜいはこんなにして思っていたが、今日こんにちまでその人に会う機会もなかったのを、今日、計はからずその道場に飛び込んで他流試合を申し入れるとは奇妙な因縁いんねんでもあり、この上もなき好機会でもある。一度は胴震いするほどに驚かされたが、好き敵御参ごさんという自負心は高鳴りをして、久しく鬱屈していた勇氣が十倍の勢いで反抗してきました。

さりながら、法に従つてまず門人衆と立合わねばならぬ。

「当道場門人の末席を汚けがす片柳兵馬と申す未熟者かたやなぎひょうま」

三人は手もなく打ち込んで四人目がかの少年。今は仮に外戚がいせきの姓を名乗る宇津木兵馬でありました。あれから四年目、兵馬は十六歳。再び道具を着ける。竜之助のは道場から借受けた道具。

門人どもはこの新來の他流の客の流風に、心中畏おそるるところあつて見ているうちに、場の真中に立ち出でた兩人は、互いにしばし席を譲つて、やがて相引き、机竜之助は西に向つて構えたのが例の「音無し」です。

島田虎之助はこの時、兩人の構えをちらと見て、机竜之助の音無しの構えの位に少しく奇異の感を起したと見えて、再び篤とくとその方を見えています。

宇津木兵馬は中段に取つて気合を籠こめているうちに、不思議なのは先方の呼吸で、サツパリ張合いがありません。

引いて構えたまま、気合もかけねば打つても突いても来ない、さりとて焦せき立つけしき気色も見えないで、立合としてこんなのは初めて。先の心を測はかり兼ねますから、やむなく自分も仕掛けて行きます。二人は道場の中に、竹刀と竹刀、眼と眼を合せたき

りで静かなものです。

もし島田虎之助という人があなたこなた彼方此方の試合の場を踏む人であつたなら、机竜之助の剣術ぶりも見たり或いはその評判を聞いたりして、疾とくにさる者ありと感づいたであらうが、そういう人でなかつたからこの場合、ただ奇妙な剣術ぶりじやとながめているばかりです。

兵馬は無論、これが敵とねらう机竜之助であらうとは夢にも知るはずがない、ただ扱いにくい竹刀かなと内心にいささか焦じれ気味です。そこで兵馬は思い切つて一声、竹刀を返して竜之助が面をめがけて打ち込まんとする時、

「籠こ手て！」

竹刀の動く瞬間に、竜之助の竹刀は兵馬の籠手を打つたのです。

「籠手、よろし」

島田虎之助は頷^{うなず}きました。

宇津木兵馬はつと、飛び退^{しき}つて、また中段に構え直しました。

竹刀の先わずかに動いたのみで兵馬の籠手を取った竜之助は、更に飛び込んで来るかと思うとそうではなく、前の通りの音無しに構えでじつと動かず。

兵馬は小手調べを見事に失敗^{しくじ}つて、こっちから仕かけた軍^{いくさ}に負けて一時ハツとしたが、この一手でおおよそ敵の手段のあるところがわかつたらしく、退^さつて中段に構えたなり動かず。

かの御岳山上で、兵馬の兄とこの人とが決死の立合をした時の瞬間がやはりこれです。兵馬はこんなジリジリした太刀先に立つのがいやになった、得意中の得意の一手、

「突き！」

兵馬の得意は諸手^{もろてづ}突きです。今も最後に他流の大兵を突き倒したあの一手。

と見れば竜之助の竹刀、突いた兵馬の竹刀を左に払って面！兵馬の竹刀それよりも速きか遅きか突き！これは前のよりも一層深かった。尋常ならば相打ち。問題はいずれの刀がどれほど深いか浅いかであつて、島田虎之助はそれを何とも言いません。

それからはいつまで経^たつても静かな音無し。ついに二人の立合は分けて終わりました。

「島田先生に一太刀の御教導を願わしゅう存じまする」

竜之助は面、籠手はずした後、虎之助の前に膝^に行^じり出でて言葉を卑^{ひく}うして申し入れると、島田虎之助は、

「いや吉田氏とやら、貴殿は妙な剣術をつかいなさる、どこで

修行なされた」

「親共につきまして小野派の一刀流を少しく学びました、それよりは別に師と頼みたる者もなく……」

「ははあ」

島田虎之助は眼をつぶつて夢を見ている体たらく。

「御高名の一手を御教授下し置かれたく……」

「……………」

島田先生、いっこう竜之助の懇願こんがんに取合いがなく、閉眼沈思の姿でありますから、

「未熟者ながら先生の太刀を……」

繰返して願つてみても、何とも返事がなく、これもさっぱり張合いがありません。

宇津木兵馬が入門の初め、島田先生はこういうことを教えま
した。

劍術は自得である。筑後梁川やながわの藩に大石進という者がある。
性質愚に近いほどの鈍根どんこんで、試合に出ては必ず負ける。後輩年
下の者にさえさんざんに打ち込まれる。そのたびごとに笑われ
嘲あざけられる。或る時、非常なる辱めはずかしに会つてから、さすがの鈍物どんぶつ
も藩の道場に姿を見せなくなった。それより門を杜とじて、天井
より糸で毬まりをつるし、それを突くこと三年間、ついに天下無敵
の突きの一手を発明してしまった。再び道場に現われた時は藩
中はおろか、天下その突きの前に立ち得るものがない。（島田虎
之助に、男谷下総守おたにしもうさのかみ、それにこの大石進を加えて当時天下の三

劍客という。）

島田先生からこの話を聞いた兵馬は、同じ方法と同じ熱心を以て突きの手を工夫し、今や同じような成功を見るに至ったわけです。

兵馬がそれとは知らずに机竜之助と竹刀を合せてから、ほぼ一カ月余りのことで、夏の日盛りを御徒町の道場から牛込のある友人のもとへ試合に行こうと、空模様おなりが險呑けんのんであつたのに、道具を肩にして出かけると、はたして御成街道から五軒町の裏つまこいざかを妻恋坂にのぼりかけた時分に、夕立の空からポツリポツリ。どこか雨宿りをと坂を上りつめた時分には、一天墨すみの如く、ガラス玉のようなのが矢を射るように落ちて来ます。

「ここで暫しばしの雨やどり」

兵馬は、とある家の門側^{かどわき}に^{たたず}ゐ、空をながめて、雲の走り去り雨の降りおわるのを待っていると、やがて盆^{くつがえ}を覆す勢いで風雨が殺到して来ました。

「婆や、早く二階を締めて下さい」

この家^やの中で若い女の声。

「お松様、引窓の紐が切れてしまいました」

これは婆さんの声。

「それは困ったね、ではわたしが二階を締めるから」

こういつて若い女は、あわてて二階へ走^はせ上つて、かいがい

しく雨戸を繰りはじめましたが、兵馬はなにげなく二階を見上げますと、いま戸を立てた女は、最後の一枚を残してそこから

驟雨^{しゅうう}の空と往来とを見ていましたのと、ちょうど両方の間が斜めに向つて、見上げても見下ろしても、ぜひ眼のぶつつかる地

位でありました。

兵馬は少女を見上げて、何となくはつと心を打たれました。女も兵馬の姿から、しばらく眼を放しませんでした。そのうち戸はピタリと立て切つて、兵馬はそれなりまた雨の降る勢いを見て立ちつくしています。

わずかの小門の廂^{ひさし}だけに身を寄せたのですから、好いあんばいに風は少し向うへ吹いて行く分のこと、袴^{はかま}の裾や衣服の袂^{たもと}には沫^{しぶき}がしとしとかけります。と、くぐり戸ががらりとあいて、

半身と傘の首だけを兵馬の前に突き出したのは以前の婆さんで、

「もし、あなた様、中へ入つてお休みなさいませ」

「はい、有難う存じまする」

「おっつけ晴れましょうから、どうぞ御遠慮なくお入りなさいませ」

「はい……」

兵馬は遠慮して、まだ入り兼ねていると、

「さあ濡ぬれます濡ぬれます、あなた様も濡ぬれます、この婆いよばも濡ぬれますほどに」

こういわれて兵馬は、好意を有難く思つてこの家の中へ入りました。

「さあどうぞ、お上りあそばして」

兵馬が中へ一足入れると、障子のところに立つていたのはいま二階からちらと見合つた少女、見れば髪かみも容かたちも眼めの醒さめるような御守殿風ごしゅでんふうに作つておりました。

雨はなかなか歇やみそうもなく、風も少しずつ加わつてくるようです。再三辞するもきかず一室しつに招しょうぜられた兵馬は、そこに坐てもちぶさたつて手持無沙汰に待つていながら、つらつらこの家の有様を

見ると、別に男の気配けはいも見えないし、茶道具とか花とか風流が
かったもののみ並べてありますが、しばらくすると絹ずれの音
がさやさやと、

「お客様、御退屈でござりましょう」

さきの女は、しとやかに入って来たので、

「いや別に——」

兵馬は取って附けたような返事。

「もう歇みそうなもの」

「ごゆつくりあそばしませ」

戸外では松の枝が折れたらしい。風雨の容易に止みそうもな
いのをもどかしがつている兵馬には、この女と差向さむかいのように
坐まっていることがとが咎とがめるようでないません。

ここはいかなる人の住居すまいで、この少女は娘であろうか、それ

にしてもこの花やかな御守殿風は……とようやく不審にも思われてきましたが、深く推量すべき必要はないことで、雨が霽はれてしまふと兵馬は厚く礼を述べて、この家を立ち出でました。

二十六

雨が上つて兵馬を帰してから暫しばらくたつて、

「お松や、さっきの若いお方はお前の知合いなのかい」

「いいえ、雨に降り込められて門前で困つておいでのようにでしたから……」

「可愛わかしゅゆい若衆わかしゅでしたね」

お松はこう言われて、何のわけもなく真赤になりました。

お松は大菩薩峠で七兵衛に助けられたお松。それを前に呼び

寄せて話しているのは、七兵衛の手からお松を預かつた切髪きりがみの年増としまでありました。

「それはそうと、明日はお邸へ上らなくてはなりません」

「はい」

「お邸へ上りましたなら、かねて申してある通り、わたしに代つて辛抱しんぼうして、殿様のお氣に入るようにして下さい」

「わたしのようないものが、お氣に入るようになられましようやら、それが心配でございます」

「殿様はお酒をおあがりなさるとお氣が荒いけれど、平生へいぜいは親切ごきげんなお方だから、御機嫌ごきげんの取りにくいことはありませぬ」

「お手荒てあらなことをなさることはございますまいか」

「まあそんなことがあつても、和やわらかにとりなすのが御奉公と申すもの」

「それでも、かよわいわたくし風情ふぜいの力で殿様の御機嫌が直りませぬ時は……」

お松が心配そうに言うのを切髪の婦人は笑って打消し、

「なにも殿様が、きつと手荒いことをなさるときまいったわけはなし、また朋輩ほうばいもたくさんあることだから……朋輩といえはお松や、殿様や家来方の御機嫌よりも朋輩同士の仲が小面倒こめんどろなのよ、よく気をつけないと嫉ねたまれたり憎にくまれたり——」

「わたしはそれも心配でございます」

「お殿様にもお氣に入り、朋輩衆にも嫉まれず、それが女の腕というもの。まあ初陣ういじんと思うて乗り込んでごらん」

「お師匠様の御恩報じのつもりで、きつと勤めまする覚悟」

お松の頼もしい言葉は、お師匠様と呼ばれた切髪の婦人の心を非常に満足せしめたようでありましたが、やや小声になって、

「それにねお松や、お前が女中衆のうちでいちばん年も若いしするから、何でもまず殿様を丸めてしまわなくては……ホホホ、丸めるといふと恐れ多いけれど、やっぱり何とかして殿様をこつちのものにするのさ、ね、おわかりかえ」

「まあ、わたしにそんなことが——」

耳まで真赤にしてお松が俯向くのを、

「ホントにお前はまだ子供で困ります」

お松がここで行けと言われている家は、四谷の伝馬町の神尾と

いう三千石の旗本はたもとであります。この切髪の婦人せんとのさまというのは先殿様

の妾めかけであつたので、殿様が亡なくなつて殊勝しゆしょうらしく髪を切つて、

仮りに花の師匠となり、弟子というものもさっぱりないけれど

も、先代からの扶持ふちやその他で裕福ゆうふくに暮らし、院号やなにかで

通るよりも本名のお絹が当人の柄に合います。

神尾の邸の中では、旗本の放蕩息子らが日夜入りびたりで賭博^{とばく}に耽^{ふけ}ると言い、十人も綺麗^{きれい}な女中がいて、それやこれやの聞きにくい噂^{うわさ}があります。お松はこれから、恩義の枷^{かせ}でその中へ送られて行かねばならぬ。言いようのない辛^{つら}さ。こんな時に兄弟でもあつたらと思うにつけて、雨宿りした兵馬の面影^{おもかげ}、かりそめの縁ながら、目先にちらついて忘るることができません。

兵馬もまたこの家を出でてから、なんとなくかの少女が可憐^{かれん}に思われて、その後もしばしばこの家の前を通りかかったことはありましたけれど、その折の少女の姿は再びそこに現われることがありませんでした。

それから一カ月ばかり後のことで、もう秋の夜長のさびしさがうつすら身に沁しみる頃、伝馬町の神尾の邸の湯殿に火を焚たいている大男があります。それは水車番の与八でした。例の独言ひとりごとを聞いていると、与八がどうしてこの邸へ来たかがわかります。「おおせんせい大先生がおなくなりなすつて俺はおらつまらなくなつたから、お江戸へでも出てみたらと当家様へ御奉公に上つたわけだが、やっぱり水車小屋にいた方が俺が性しょうに合つてゐる、あれほど親類の衆も言つて下すつただから水車番をしていればよかつたに、俺モウいちど水車小屋へ帰けえるべえか……」

与八は今の境遇よりも水車小屋の昔が懐なつかしいと見えて、「あのガタンピシンという杵きねの音や、ユックリユックリ廻まる万力まんりきや、前の川をどんとと威勢よく流れる水の音なんぞが、なんぼう好い心持だか。お地藏様も小屋の中へ押立て申して、あとの

人によく信心のう、するように頼んでおいたが、御岳様や貧乏山びんぼうやまなんぞも紅くなりはじめたことだんべえ。俺が水車にいと、よく前の川へ鹿の野郎が水飲みに来たつけ。モ一ぺん水車小屋へ帰るべえか。帰ったところで大先生がいねえことにやつまらねえな」

与八の独言はここで一段落になつて、あとがしばらくひ、つ、そり、と——ぷしぷしと火の燃える音のみが聞えます。

おりから、本邸の方でどつと人の笑う声、それも一人二人ではなく、男の声に金かねを切るような女の声まじが交つて騒がしい。

「ああまた始まった、ここのお邸はまるで化物屋敷だばけものやしき」

与八は苦にがり切つていると、引続いてキャツキャツとひっくり返るような女の笑い声。

「侍たちも侍たちだが女中たちも女中たちだ、女の子にお邸奉

公なんぞさせるもんでねえ、ああしてみんな自墮落じだらくになつちまう……ついこの間も、若いお女中が入つて来なすつたが、いじらしいことだ、あんなしおらしい女の子もやがて滅茶滅茶に摺すれからしちまうだんべえ」

この時またもひとしきり男女の噪さわぎ返る声、ドーンと笑い崩れてまたひつそりとしてしまいました。

「どれ、水でもちつと汲んどくべえ」

与八は手桶ておけをさげて井戸端へ出かけます。

主人の神尾主膳かみおしゆぜんというのは三十越したばかりで、父が死んで

の後はいい気になつて、旗本の次男三男という始末の悪いやくざ者を集めて来ては、己おのが家を倶楽部くらぶにしてさんざんの振舞ふるまいですが、今宵こよいも八人の道楽仲間を呼び集めて、これに七人の女中そうでが総出で広間を昼のように明るくし、

「これより竹の子勝負」

と聞いて女中たちは面見合せ、

「まあいやな」

眉をしかめていぶかしげな笑い方をする。

「さあ円くなれ、おのおの方、組を合せ給え、読みは拙者がする」

侍どもと女中たちは夜会の席のような具合に一人ずつ席割せきわりをして円く組み合いましたが、女中どもはこんなことに慣れきつていると見えて恥かしがりもせず。

「ああつまらん、身共みどもばかりは独り者」

投げ出すように言い出したのは、芳村よしむらという若い侍。

「おおこれは、芳村氏が男やもめ、笑止しょうし」

すべての人が奇数であつたために男やもめがひとり出来てし

まつたのを、主人は膝ひざを打つて、

「みどり、が見えぬ、みどりを呼べ」

みどりとは、三日前にこの屋敷へ見習奉公に來たお松のことです。

「みどりさん、みどりさん」

高萩と花野と、もひとり月江という女中が都合つじう三人で、お松のみどりの部屋へ駆け込んで來て、

「殿様のお召しでござりまする、直ぐにいらつしやい」

「はい……」

「ただいま百人一首が始まつたところ」

「あの、せつかくではございますが気分がすぐれませぬ故」

「気分がお悪いとや。些ささい細な不快はあの面白い遊びで癒なほつてし

まいまする、さあさあ早く」

「それでも、わたくしには歌が取れませぬ」

「なんのまあ、お前様ほどの物識ものしりが」

「いいえ、まだ百人一首の取り方も存じませぬ、左様さようなお席へ出ましては、かえって失礼に存じまする故」

女中たちは左右から、みどりの手を取り抱き上げんばかりにして、

「殿様のお言いつけでござりまするぞ、そのような我儘わがままは通りませぬ」

一人が言ええば、

「ほんに、みどりさん、お前はいつもいつもこのような折は、不快ふちようほうじやの不調法じやの言いくるめて引込んでばかり。今日は許ませぬ」

花野は躍起やつきになって、みどりの手を引張りながら、

「あれ、あのよう^にに殿様のお声が聞えまする、早うせぬとあとでどのようなお叱^{しか}りに会うことやら」

みどりはどうにも已^やむを得ません、三人に引きずられるようにして広間へ来て見ると、形^{かた}のような有様で。

「やあ、みどり見えたか、芳村殿の右へ坐れ、そちも勝負に加わるのじゃ」

主人はこう命令すると、女中どもはみどりを芳村の隣席へ押据える。

「みどり殿、遠慮してはいけない、さあ、この札をよく見て、それから自分の前へ斯^か様なあんばいに並べてお置きなされ、よい^か、あれにて神尾殿が読み上げたなら、遠慮なく拾^{そうら}い取り候え」

芳村はそう言いながら札を取って、みどりの前に並べてくれます。

「わたくし、まだ札の取り方も一向に存じませぬ」

「いいや、むつかしいことはない、自分の前だけ守っておれば仔細しさいはない、その代り、自分の前を人に拾われたら一大事じゃ」
みどりは百人一首の歌だけは覚えておりますけれど、こんなふうふうに札の取り合いをしたことがないので、ただもじもじして
いると、

「よろしいか、はじめるぞよ」

主膳は咳せき払いして席を見廻し、

あらざらむ……

「しめた！」

芳村は手を伸べて、太田という隣席の札を一枚とんと指の先では刎はね上げました。一枚とられた太田は何のためか、締めていた帯を解いてポンと向うへ投げ出す。

みどりが呆あきれてゐる間に、

夜をこめて……

眼も少々上うわずつていた高萩が頓とんきよう狂な声を出して、

「ありました」

身を躍おどり出して押えたのが、みどりの前の札でした。

「さあ、みどりさん」

みんなの眼がみどりの方に向く。左右の二人は、

「帯をお取りなさい」

みどりの帯へ手をかける。

「まあ、何をなさいます」

「そんなに驚くことはない、これは竹の子勝負というて、一枚とられたら一枚ぬぐというきまり、それで最初には帯から……」
みどりは驚いてしまつて、その手を振り払おうとする間に、

かえつてこんなのを面白がる連中は、寄つてたかつて無残にも
みどりの帯を解いて、あちらに投げ出す。

みどりは身も世にあられぬあさましきを感じてポーツとして
いると、

春の夜の……

「ありました」

花野は高萩の前にあつたのを横の方にポンと飛ばし、

「みどりさんの仇を討ちました」
あだ

夕されば……

「しめた！」

最初にやられた太田が飛び出したのは、運悪くまたしてもみ
どりの前でした。

「やれお気の毒な、いざ一皮むき給え」
ひとかわ

寄つて来て、みどりの上着うわぎに手をかける。

「どうぞ御免あそばして」

必死にいやがるを、けつく一倍おもしろがる。

「みどり、そんなにむずかるものではない、ほんの座興じや」
上着を剥はがるれば下は間着あいぎ。

もろともに……

「ありました」

またしても意地の悪い高萩は、みどりの弱味をつけ込んで覘ねらつていた図が当る。

「みどりさん、かさねがさねお気の毒」

間着を脱げば下は襦袢じゅばん。

「どうぞ御免あそばして」

みどりは腕を組んで固くそこに突伏つつぶしてしまいました。

「何という騒ぎだ」

水汲みに出た与八は、手桶を井戸側に置いて、奥庭の彼方に見える広間の障子に入り乱れた影法師を見ながら突立つてゐると、庭の石燈籠の蔭で、人らしいものの形が動く。

「はて誰だんべえ、あんなところに人のいるはずがねえ」

与八はつるべ縄へ掛けた手を休めて見ていると、その人の影は泉水せんすいの池のほとりから奥殿の廊下の方へと進んで行きます。

どろぼう
泥棒だ、泥棒に違えねえ、

「泥棒！」

与八が大きな声で叫ぶと、その声は外あやなる怪しの男よりも、家の中の大一座を驚かして、障子を蹴け開ひらいて廊下へ走り出でます。

その翌日の朝、与八は竹箒たけぼうしで庭を掃いていますと、ほかの女中は昨夜の疲れで寝ているのに、みどりの部屋のみは障子があいて、もう起きていますようです、それとも夜通し寝なかつたものか。

それとは知らずに掃いて来た与八は、

「これは、みどり様、お早うございます」

箒の手を休めて、頬ほお冠かぶりをちよいと外はずしてお辞儀じぎをする。

「与八さん、たいそう早く御精ごせいが出ますね」

「エエ、どう致しまして。わしらあ別に早いこともありましねえが、お前様めいさまこそエラク早起きで」

「昨夜ゆうべは御苦労でしたねえ。まあ少し、ここでお休み」

みどりは障子をあけて親切に与八を労^{いた}わり、

「お茶を一つおあがり」

茶と菓子とを縁側のところへ持つて出ます。

「こりやどうも恐れ入ります」

与八は大悦^{おおよろこ}びで、

「お前様はいつも、わしらにそんなに親切をして下さるから有難えと思ひます、ほんとに済みましねえ」

悦びながら相当に遠慮をしているのを、

「さあそこへお掛け。与八さん、わたしはお前さんにお礼を言わねばなりません」

「なんの、お前様にお礼を言われるようなことをすべえ、行届かねえ田舎^{いなか}者ですから、面倒^{めんどう}を見てやっておくんなさいまし」

与八は頬冠^{わし}りを取つて手拭を驚^{おど}づかみにして、しきりにお辞

儀をしています。

「お茶がはいりました、遠慮をしないで」

「はい、どうも済みましねえでございます」

与八は、やつとのことで縁側へ腰をかけ、無器用ぶきような手つきをして、恐る恐る茶碗を取り上げておしいただきます。

「甘いものは好きかえ、ここに羊羹ようかんがあります」

「どうも済みましねえ、こんな結構なお菓子をいただいてどうも済みましねえ」

与八は片手に茶碗、片手に羊羹をいただいて、幾度もお礼を繰返す。

「与八さん、お前はずいぶん立派な体格ねえ」

「ええ、大くでかばかりあつてこの世の穀ぐくつぶしみたようなものでございます」

「その身体では力もありましようね」
からだ

「力ならたいがいの人に負けましねえ」

無邪気なる自負の色を浮ばせて、

「力ずくなら誰にも負けねえけれど、昨晚の泥棒みたようなす
ばしつこい奴には敵わねえ、幽霊みたようだ、そこにいたかと思
うとスーッと消えてしまふだ、あんな泥棒はつかめえどころ
がねえでがすから力ずくにやいかねえ、それでとうとう取逃が
してしまつた」

与八、少々残念らしく見えます。

みどりのためには昨夜の泥棒は、虎口を救うてくれた恩人
であります。この与八があの時、泥棒！ と叫んでくれたればこ
そ、おかげで恥かしい目をのがれたものです。みどりはそれと
は言わずに、話を別の方へ持つて行つて、

「あの、与八さん、お前のお国はどちら」

与八は羊羹を頬ほおばった口をゆがめて、

「俺おらが生れ土地はどこだか知らねえ」

「ホホ、生れ土地を知らないの」

「俺、棄児すてごだからな、物心ものごころを知らねえうちに打棄うつちやられただから、どこで生れたか知らねえ」

「まあ、お前さんは棄児……」

「そうだが、青梅街道というところへ打棄られて、人に拾われて育つただから、生れ土地は知りましねえ」

「かわいそうに。そうして、育てられたのは？」

「それはね、この玉川上水を二十里も上かみへのぼると沢井という所がありまきあ、その沢井の机弾正という先生に拾われて育てもらったがす」

「それでは多摩川の上の方^{かみ}。わたしも子供の時分、あのへんを通ったことがあります」

「そうかね、あの街道は甲州の大菩薩峠というのへ抜ける街道だ」

「大菩薩峠……」

「大菩薩峠というのは上り下りが六里からあるで、難渋^{なんじゆう}な道だ」

「ああ、そうでござんす、あの大菩薩には猿がたん^{たんと}いて、峠の頂上には観音様のお堂がありましたなあ」

「お前様^{めいさま}よく知ってござるが、あの峠を越したことがおありなさるのかえ」

「エエ、四五年前に」

「四五年前……それではやつぱり俺^{おら}があの水車小屋にいた時分だ」

「与八さん、いつか一度あの大菩薩峠へ、わたしをつれて行って下さいな」

「あんな山奥へかい」

「わたしは、モ一ペンあの峠へ行つてみたい」

「俺もお前様、ほんとうの話は、この頃こちらで奉公をしているけれども、やっぱり昔の山ん中がいいと思うからお邸を暇^{ひま}を貰い申して帰るべえかと思つてるところでがす」

「まあお前、奉公が飽きたの」

「ああ、厭^{いや}になつちまつた、俺^{おら}がには水車番^{しやう}が性に合つてゐるだあ」

「そんなことは言わないで、いつまでも一緒に御奉公をしていておくれ、そして帰る時には、わたしを大菩薩峠まで連れて行つて下さい」

みどりの眼には涙が宿ります。与八はしばらく考えていました、

「お前様にそう言われると、俺もなんだかお前様を残してこのお邸を出かけるのが気がかりになるだ」

与八は、みどりのために蔭かげになり日向ひなたになって力を添え、みどりは与八と唯一ゆいつの頼みにして、二人は兄妹きょうだいのように親しみを加えてゆきます。

幸いにしてその後、みどりの身の上には格別の危あぶないこともなく、ほかの侍女こしもとどもが主人の寵ちようを専もつぱらにしておりますので、引込みがちで隠れた仕事をのみして日を送っております。

「新徴組」^{しんちようぐみ} という壮士の団体は、徳川のために諸藩の注意人物^{おき}を抑える機関でありました。まず江戸市中に入り込む志士或いは浮浪の徒を捕縛し、手剛^{てごわ}いのは暗殺する、これが「新徴組」の役目であります。

神田柳原の金子という同志の家の一間で、凄^{すご}い目つきをした十余人の新徴組が、朝から寄り集まってはささやき合い、一人出て行き、二人出て行き、また一人戻り二人戻り、何か打合せをしている。十一月の末で、今日はよほど寒い、天も朝からど、んよりとしていたが、夕方からははたして粉のような雪が降りはじめました。

寛永寺の暮六^{くれむ}ツが鳴ると、最後に出かけた一人が立帰って、「隊長、首尾は上々じゃ」

「それは大儀」

隊長と呼ばれたのは水戸の人、芹沢鴨。せりざわかも。

「杉山左京が邸を乗り出した駕籠が二挺、かご ちよう、その後ろのがまさし

く清川八郎」

「確と？」しか

「相違ない、拙者は武兵衛ぶへえにあとを頼んでおいた、急ぎ用意あつ

て然るべし」しか

「心得たり」

十余人が躍り立って用意の黒装束。おど くろしやうぞく

一方には大盃たいはいになみなみと酒を注いで、

「待て、後ろなるはめざす清川八郎、前なるは何者じゃ」いちぐう

一隅から吼え出したのは、新徴組の副将で、鬼と言われた

近藤勇。こんどういさみ

「おお、それでござるが」

斥候ものみから帰つて来た武士は近藤の方へ向いて、

「それはたしかに高橋伊勢守いせのかみ」

「ナニ、高橋！」

一座が面かおを見合せる。

高橋伊勢守は後の泥舟翁でいしゅうおう、槍やりを取つては当時海内かいだいの随一人ずいいちにん。

その頃、丸の内の杉山左京という旗本の邸に、月二三回ぐらい

ずつ毛色の変つた人々が集まつて、四方山よもやまの話をする会があつ

た。集まる人は高橋伊勢守、山岡鉄太郎、石坂周造、安積五郎あづみ、

清川八郎、金子与三郎、それに島田虎之助の面々で、幕臣もあ

れば勤王家もある、大した人数ではなかったけれど、この会合

は新徴組からヒドクめざされていました。ことに清川八郎こそ

奇怪なれ、彼はいつたん新徴組の幹部となつた身でありながら、
蔭には勤王方に心を運ぶ二股者、まず清川を斬れとその計画が
いま熟しつつあるので、昼のうちより杉山邸へ放つた斥候が、
いま上々首尾の報告を齎したわけです。

「高橋何者ぞ、彼ももろともに叩き斬れ」

隊長芹沢の気色ははげしい。

「伊勢守は幕府の重臣じゃ」

口を挿んだのは近藤勇とは同郷、武州多摩郡石田村の人士方歳三。

「幕臣でありながら浮浪者と往来する高橋伊勢め、幸いの折だ、

清川もろともに叩き斬るがよい、それとも従五位の槍が怖いか

な」

芹沢はこういつて近藤、土方の面を意地悪く見廻すと、勃然
としたのが近藤勇です。愛するところの抜けは必ず人を斬ると

いう虎徹こてつの一刀を引き寄せて、

「近藤勇が虎徹ここにあり、高橋伊勢、槍を取つての鬼神なりともなんの怖るるところ」

昂然こうぜんたる意気を示して芹沢を睨め返す。

「待て待て」

土方歳三は徒らいたずに気の立つ芹沢と近藤とを和なだめて、

「今夜めぎすは清川一人、余人よにんを突つついて無駄の骨折りするも面白からず、二人の駕籠が離るるまで待つて、やすやすと清川の首を挙ぐるが労少なくて功が多い、いかがでござるな」

「うむ——」

芹沢も近藤も一座も僅かに頷うなずいて土方を見る。

「これより見え隠れに二人が駕籠の跡を追ひ、高橋が乗物の離れたる折を見て清川を血祭りにする、もしその折を得ずば二人

もろとも」

「よし、それも一策じゃ、しからばこの仕事の采配さいはいを土方氏、貴殿に願おうか」

芹沢にいわれて土方歳三は言下げんかに引受け、

「承知致した、貴殿ならびに近藤氏はこれに待ち給え、仕留めしとめて参る」

「総勢十三人、よいか」

「よし」

このとき近藤勇は、ふと一座の一隅いちぐうを振返つて、

「吉田、吉田氏」

少し酔うてさきほどから眠つていたらしい一人を呼びかけて、押しゆすると、むっくり起きてまばゆき眼を見開いたのは机竜之助でした。

机竜之助は近藤、土方らとは同国のよしみで、しばらく新徴組に姿を隠しております。呼び醒さまされて、

「眠り過ぎした」

刀を取って一座の方へ進み寄ると、土方歳三が、

「吉田氏、いずれもかくの通り用意が整うた」

「ほう、拙者も仕度したくを致そう」

竜之助は、身ごしらえ、足ごしらえ、黒い頭巾ずきんを取って被かぶろ

うとしながら、

「相手は清川一人か」

「さいぜんも申す通り、別に苦手にがてが一人」

「苦手とは？」

「槍の高橋伊勢守が同行」

「さらば二人もろとも殺やるか」

「いや、めざすは清川一人なれども、罷り違えば高橋もろとも」
「うむ」

竜之助は土方の面と岡田の面とを等分に見比べながら、

「もし高橋を相手に取る時のその手筈は？」

「拙者はおのおのと直ちに清川に向い申さん、高橋邪魔立て致さば吉田氏、貴殿と岡田氏にて」

「心得た」

土方は手勢をまとめて清川に向い、まんいち高橋その他の邪魔立てもあらば、机竜之助と岡田弥市とがこれに当たるといふ手筈をここにきめました。

新徴組は野武士の集団である。野にあつて腕のムズ痒さに堪えぬ者共を幕府が召し集めて、最も好むところの腕立てに任せ

る役目ですから、毒を以て毒を制すると謂^いつべきものです。

近藤勇は野猪^{やちよ}のような男である。感情に走りやすく、意氣^{じゆん}に殉じやすい代りに、事がわかれば敵も味方もなくカラリと霽^はれる、その劍の荒いこと無類、術よりは氣を以て勝つ。

土方歳三はこれに比べると陰忍の男である。落着いていたが^{あば}荒れる時は近藤以上に荒れる。怨みはよく覚えていて、根に持つていつまでも忘れない。近藤は御^{ぎよ}し易^{やす}し土方は御^{がた}し難^{がた}しと有司^{ゆうし}も怖れていた。隊長の芹沢は性質がことに僻^{ねじ}けていた。後に京都で近藤勇に殺される。芹沢死して後の新徴組は、近藤勇を隊長として改めて「新撰組」となる。それは後の話。

雪はチラチラと降りつづき、夜は四ツ過ぎて、風がないからわりあいには寒くはないようなものの、時節柄ですから人通りな

どはほとんどありません。

ねりべいこうじ

練堀小路あたりで按摩あんまの笛、駿河台の方でびようびようと犬

が吠える。物の音はそのくらいのもので、そこへ二挺ちようの駕籠が

前後して神田昌平橋にさしかかる。

かじわき

かつ

前の駕籠側には一人の供が槍を担いでついている、後ろの提灯ちようちん

の紋は抱茗荷。
だきみようが

二つの駕籠が雪の昌平橋を無事に渡りきると、棒鼻ぼうばなの向きが

少し変つて、前のは講武所の方へ向き、同時に駕籠の中から何

か声高に言うのが聞えると、それに応じて後ろなる駕籠の中か

らも、前のよりは少し低い調子で一言二言言い出すのが聞えま

ひとことふたこと

す。

そこで二つの駕籠は別れて、前のは槍を持たせたまま、講武

所から聖堂の方を指して行く。後ろなる抱茗荷のは、そのまま

一直線に外神田から上野の方面をさして進んで行きます。

その時、昌平橋のこつちに海坊主の寄合よりあいのようにかたまつて、その乗物にちつとも眼を離さなかつた連中が、今や前後の乗物が別れたと見るとスーッと爪先つまさき立つて橋を渡り、太刀の柄つかを握り締めた十余人は、いわずともかの土方歳三を大将とする新徴組の一団です。

かの槍を持たせて講武所から聖堂の方へ別れた乗物は、疑いもなく高橋伊勢守で、高橋の邸は牛込かぐらざか神楽坂で、邸内には名代なだいの大楠おおくすのきがあつて俗に楠のお屋敷という、それへ帰るものに相違ないのです。案の如く高橋をイナすことができて、めざす清川八郎ただ一人。新徴組の壮士は刀の鯉口こいぐちを切つて駕籠をめがけて一時に飛びかかろうとするのを、土方は、

「叱しつ！」

と制する。大将の許がないので、腕は鳴り刀は鞘さやを走ろうとするのを抑えて、土方を先に十余人が乗物のあとをついて、五軒町、末広町と過ぎて広小路へかかろうとするが、土方はまだ斬れとも蒐かかれとも言いません。

こんなことを知ろうはずのない清川の乗物は、ずっと上野の山下へ入って行きます。

「町家ちやうかを避けて山へ追い込み、そこで充分に仕遂しとげるつもりだな」

こう思めいめいつて各々は同じく山下へ入り込んで行きましたが、究竟くつきようと思う木蔭山蔭をも無事に通り抜けさして、ついに鶯谷うぐいすだに、新坂しんざかの下まで乗物を送って来てしまいました。

何のことだ、ここを過ぐれば山は尽きる。

新坂から鶯谷へかかる所、後ろはものすごい上野の森、離れては根岸から浅草へわたり、寺院や武家屋敷の屋根が所まばらに見えるくらいのものです。

清川八郎を乗せた駕籠がいよいよ新坂下の原までかかった時に、雪は降ることが大分薄くなつて、おりから月のあるべき夜でしたから空はいちじるしく明るく見えしました。

「その駕籠、待て！」

今まで息を殺していた土方歳三が^{だいかついつせい}大喝一声、自ら^{みづかさつ}颯と太刀を引き抜くと、^{いなごし}蝗の如く十余人抜きつれて乗物を囲む。

^{かじかき}駕籠舁はそれと見て立ちすくみ、

「誰だ、誰だいッ、ふ、ふぎけたまねをするない」

振舞酒の余勢で巻舌をつかつてみましたふるまいざけ まきじたが、からきり物になりません。提灯を切り落されると地面に突伏して、

「御免、お助け、命」

「行け！」

ほしいままに駕籠昇風情の命を取ることを好まなかった。こ
けつ転びつ彼等が上野の山蔭に逃げて行くに任せて、さて十五
人の刃は一つの乗物に向う。やいば

駕籠の中はヒソリして、ほとんど血の通う人の気はあるま
じき様子です。眠っていたならば覚めねばならぬ、覚めていた
ならば起きねばならぬ。

「出ろ！」

呼ばわつてみましたけれども、相も変わらずヒソリとしたも
のです。土方歳三は一人の黒と頷き合うと、スーッと左の方か
うなず

ら進み寄つて太刀を取り直す。

同時に、いま領き合つた黒の一人は、右の駕籠側わきに廻つて太刀を振りかぶる。

残る十余人はやや退いて、透間すきまもなく遠巻きにしていると、土方が取り直した太刀は矢の如く、巖いわも透れとおと貫いた——が、やつぱり手答えもなんにもない。

と見れば、太刀を振りかぶっていた黒の一人は、何に驚いてか、

「あつ！」

と叫んで柳の葉の落つるように太刀を振捨てて、身は屏風びょうぶを倒すように雪の中にのめつてしまいました。

土方をはじめ一団がこれほど驚くときは遅く、北の方にめぐらされた寺の垣根を後ろにとつて、下緒さげおは早くも襷たすきに結ばれ、

太刀の構えは平青眼。ひらせいがん

「無礼をするな、拙者おかちまちは御徒町の島田虎之助じゃ、果し合はたあいならば時を告きたげて来れ、恨みがあらばその由よしを言え」

「しまった！」

思わず叫び出でたのは土方歳三です。

藪やぶを突いて蛇ではなく、駕籠を突いて虎を出してしまった。

これより先、清川八郎は、丸の内の杉山邸を出づる時、取違えて島田の駕籠に乗って出てしまったので、島田は清川の駕籠で帰ることになったのです。

至極しごくの達人には、おのずから神しんに通ずるところのものがある。

この途中、島田虎之助はフト怪しい気配けはいに打たれたので、もとより新徴組がかく精鋭を尽して来ようとは思わなかったが、心得ある乗り方で乗物の背後にヒタと背をつけて前を貫く刀に備

え、待てと土方の聲がかかった時分には、既に刀の下緒は襷に綾あやどられ、愛刀志津三郎の目釘めくぎは湿しめされていた。空くうを突かした刀の下から同時にサッと居合いあいの一太刀で、外に振りかぶって待ち構えていた彼かの黒の一人の足を切つて飛んで出でたものです。これを見て大将の土方歳三が、しまった！ と叫んだのも、もとより当まさに然しかるべきところで、人違いの失策もあろうが、島田虎之助がそのころ一流の剣法であつたことを知らないはずはない。
い。

しかしながら新徴組に集まるほどの者で、名を聞いたばかりで聞怖ききおじするような者は一人もなかったのです。またここまでやりかけて、人違いでしたかそうでしたかと引込むような人間は一人もなかったのです。彼等はみな一流一派に傑出した者共で、無事に苦しんでその腕の悪血あくちが取りたさにこの団体に入つ

たくらいでしたから、人違いなどは大した問題ではなく、むしろ剣法において当代一の極め付きわつきの島田虎之助を突き出したこともつけを勿怪の幸いと感じたくらいのものであります。

その中にも、岡田弥市と共に後詰ごづめの役を引受けた机竜之助は、またしても思いがけず島田虎之助と聞いて、親の敵かたきに出会ったように肉がブリブリと動きます。彼はやや離れた物蔭に、島田の構えをじつと睨んで立っている。

なんにしても人違いは人違いに相違ない、先方の名乗りを受けて土方は何と言うか。

「殺やれ！」

土方歳三は退引のつびきならぬ決断で火蓋を切ったものです。

「エイ！」

銀山鉄壁を裂く響、山谷さんごくに答え心魂しんこんに徹して、なんとも形容

のできないすさまじき気合ともろとも、夜の如く静かであつた島田虎之助は、颶風ぐふうの如く飛ぶよと見れば、ただ一太刀で、僅かに一步を踏み出した新徴組の水島某は肩先より、雪を血に染めて魂たましいは浄土へ飛ぶ。

島田虎之助は水島を切つて落して、飛び抜けて彼方かなたの立木を後ろに平青眼。

げに夜深よふかくして猛虎の声に山月の高き島田の気合に、さしも新徴組の荒武者が五体。ピリ。ピリと麻痺まひします。

と見れば、大塚某は片手を打ち落されて折重なつて雪に斃たおる時、島田の身は再びもとの塀へいを後ろに平青眼、ほとんど瞬またたきをする間に剛の者二人を斬つて捨てたのです。

島田虎之助は劍禅一致の妙諦みょうていに参じ得た人です。もと豊前中ぶぜん

津の人。若い時は気が荒く、ややもすれば人を凌辱し輕佻と思われるくらいでしたが、劍の筋は天性で、二十歳の頃はすでに免許に達していたということです。

藩を浪人して諸国を修行し、武術に限ることはなく、およそ一芸一道に秀でた者は洩れなく訪ねて練り上げたもので、流儀の根本は直心陰じきしんかげです。

その後、劍道の至り尽せぬところに禅機の存することを覺つて、それから品川の或る禅宗寺ぜんしゅうでらへ参禅しはじめたのが三十歳前後のことであつたと申します。それから五年の間、一日も欠かすことなく、氣息を調え丹田たんでんを練り、ついに大事を畢了ひつりようしました。

参禅以後は人間が一変したということで、以前の輕佻粗暴はおもかげその面影もなく、おのずから至人の妙境しじんが現われて来たそうで

す。

劍を取る時は平青眼ひらせいがんにじつとつけて、相手の眼をみつめながらジリリと進む、それに対するといかなる猛者もさも身の毛が豎たつたそうであります。ジワリジワリと柔かな劍のうち測り知られぬ力が籠こもつて、もしも当の相手が不遜ふそんな挙動をでも示そうものなら、その柔かな衣が一時に剥落はくらくして、鬼神も避け難き太刀先が現われて来るので、みている人すら屏息へいそくして手に汗を握るという。おそらくこの人は、その当代随一の劍であつたとどまらず、古今を通じての大名人の一人であつたと信じておいてよかろうと思う。

飛び込んで斬って飛び抜ける、或いは飛び込んで斬られて斃たおれる、斯様かような場合において刀の働きはこの二つよりほかはない。

「エイ！」

例の気合のかかる時は島田虎之助の身は囲みを破つて敵の裏に出でた時で、その時はすでに新徴組の一人二人は斬られてゐるのです。

敵も人形ではない、命知らずの荒武者にしかも一流の腕を充分に備えた血氣盛けつきざかりです。それが二太刀と合すことなくズンと斬り落される、あまりといえ果敢はかないことです。

すでに五人を斬つて捨てた島田虎之助は、またかの堀際へいざわに飛び戻つて悠然ゆうぜんたる平青眼の構え。

しかし感心なのは、さすがに新徴組で、眼の前にバタバタと同志が枕を並べて斃たおされても、一人として逃げ腰になつて崩れくずの氣勢を示すものがないことです。島田虎之助を虎にたとうれば、これはまさに肉を争う狼の群むれです。

ひとり机竜之助は、ぼうぜん呆然と立つてこの有様を少し離れた物蔭よそごとから他事のように見ています。

島田虎之助と別れた高橋伊勢守は、神楽坂の屋敷へ帰つて清川八郎と話しているところへ、この注進が伝わりました。

「はて不思議じゃ、今の世に島田をねら覗う命知らずありとも覚えぬに」

清川八郎がこの時ハタと膝を打つて、

「さあその黒装束の一隊こそまさしく新徴組、これは片時もゆうよ猶予なり難し」

「新徴組なりや島田を覗うはずがない、こりや人違いじゃな」

「乗物の取違えから、拙者を恨む新徴組の奴輩やつぱらが、誤つて島田先生を襲うたに相違ござらぬ」

清川は一刻もこうしてはおれぬ。

「人に斬られる島田ではないが……」

と言つて高橋伊勢守も静かに立ち上る。

まもなく楠屋敷の門を、陣笠に馬乗羽織、馬に乗った伊勢守の側わきに清川八郎がついて、雪を蹴立てて走り出すと、従五位の槍やりもちの槍持おくがそれに後れじと飛んで行く。

三十一

高橋伊勢守と清川八郎とが馳はせつけた時は、新坂下は戦場のような光景で、気合の声は肉を争う猛獣の吼ほゆるが如く、谷から山に徹こたえる、雪と泥とは縦横じゅうおうに踏みにじられた中に、右に左に折重たおなつて斃おれた人の身体からだが五つ六つは一目に数えられる、

血の香いはぷんとして鶯谷に満つるの有様です。

堀を背後に平青眼に構えて、前には少なくともまだ十人の敵を控えた島田虎之助の姿を見るや、清川八郎が太刀を抜いて新徴組の中へ切り込もうとするのを、馬から下りて従五位の槍を槍持の手から受取った高橋伊勢が、

「人に斬られる島田でない、ここにて見物せられい、差出さしいでては邪魔になる」

清川を制して、

「仙助、この提灯ちようちんを持て」

提灯を上げると、そこらあたりが薄月うすづきの出たほど明るくなる。

「エイ！」

島田の気合。バタバタと雪に倒れるもの二人。

「エイヤ！」

新徴組の入り乱れた気合。一旦パツと離れてまた取囲んだ人の数を数えてみればおぼ朧ろに六個はたしかです。

島田虎之助の斬り捨てたのがこの時すでに七人です。いかに達人なりとも七人の人を斬れば多少の疲れを隠すことはできない、またいかに名刀なりとも、これほどの斬合いたいに傷まぬはずはあるまい。不思議なことには島田虎之助は、一人斬っても二人斬っても構えがちつとも崩れない、三人斬っても四人斬っても呼吸に少しの変りがないのです。もし明るい日で見たら、彼の面かおの色も余裕綽々として子供を相手にしているほどに見えたかも知れません。

しかしながら新徴組もやはり豪えらことは豪い、これほどにならぬ前に逃げ出すのがあたりまえです。島田虎之助とても逃げる敵を追いますまい。しかるに味方みかたの過半数を斬られて一人も逃

げず一步も引かない、この分では最後の一人が斃れるまでこの斬合いは続くであろう。それというのが彼等はみな拔群の使い手で、我こそ島田を斬らん我こそ我こそという自負があつたからです。

こちらから見てみると一際^{ひときわ}じつと静まり返つて、しばらく天地が森閑^{しんかん}として冴^さえ渡ると、

「エイ！」

たがいの気合が沸^わき返る、人は繚乱^{りょうらん}として飛ぶ、火花は散る、刃^{ひらめ}は閃く、飛び違い走^はせ違つて、また一際^{ひときわ}納まった時、寄手^{よせて}の人の影はもう三つばかりに減つています。

島田虎之助はと見れば、これは前と変らず平青眼。

地に斃された人の数はこの時すでに十一を数えられて、そして残るところの新徴組は都合^{つづう}四人。この四人はみな名うての者

です。

机竜之助と共に高橋伊勢守に当る手筈であつた岡田弥市というのは小野派一刀流で、そのころ有数の剣客です。いまひとり加藤主税ちからというは溝口派みぞぐちで、有名な道場荒し、江戸中に響いていた達者でうりきで剛力ごうりきです。いざや島田を斃すは我一人と、井上真改しんかいの太刀を振り翳かざして飛び込んで来たのを、島田虎之助の志津三郎は軽くあしらつて発止はつしと両刀の合うところ、ここに鏢競合つばぜりあいの形となりました。

加藤主税は炎ほのおを吐くような呼吸と雷いかずちのような気合で、力に任せて鏢押しに押して来ると、島田虎之助はゆるゆると左へ廻る。とにかくにも、今までの斬合いで島田と太刀を合せて鏢競合まで来たのは加藤ひとりです。それを見ていた岡田弥市は何と思つたか、太刀を振りかぶつてちょうど島田虎之助の背後うしろへ廻

り、やツと^{おが}拌^{うち}み討。

見ていた高橋伊勢守がこの時はじめてひやりとしました。

島田虎之助は前後に剛敵を受けてしまったのです。前なる加藤主税がエイと一押し、鰐と鰐とが^{もみくだ}揉碎けるかと思えたところ、

「エイ！」

組んだる太刀が島田の気合で^{はず}外れたかと思えば電光^{いっせん}一閃、

「うむん——」

井上真改の一刀は^{つばもと}鰐元から折れて^{かなた}彼方に飛び、水もたまらず

島田の一刀を肩先に受けて、^{すき}凄まじき絶叫をあとに残して雪に斃れる。それと^{かんはつ}間髪を容^いれず後ろから廻った岡田弥市の^い拌み討。

島田虎之助は、加藤主税を斬つたる刀をそのまま身を沈めて^{しやおう}斜横に後ろへ引いて^{さつ}颯と払う。理窟も議論もない、人間を腹部から

上下に分けた胴切りどうぎです。

一太刀を以て前後の敵を一時に斬る、これを鬼神の働きと言わずして何と言おう、高橋伊勢守がこの時はもうすっかり島田の手腕に敬服してしまつて、ここは剣ではない禅であると、生涯歎称して已やまなかつたとのこと。

机竜之助は何をしている。心おくれたか、逃げ出したか。いやいや、まださいぜんのところに立っている。竜之助が出なければ、残るところは大将の土方歳三ただ一人です。

土方歳三もかねて島田の噂うわさは聞いていたが、これほどの人とは思わなかつた。しかしこうなつても、持つて生れた気象きしょうは屈することなく、透すかさず斬り込んで来た度胸どきょうには島田虎之助も感心しました。

「ははあ、あれが土方歳三じゃ」

高橋が清川を顧みて言う。

「いかにも土方、惜しいものじゃ」

清川八郎は土方歳三をよく知っている、日頃一廉ひとかどの人物と見ているところから、ここで島田のために斬られることが、自業自得じごうじとくとは思いいながら惜しいと思うのも人情です。

二人が土方の噂とたんをしている途端、

「おう——」

絶望の叫びで土方は島田のために太刀を打ち落されてたじろぐところを、犬の子を転ころがすように引き倒され、起き上ろうとした時は、島田の膝は背の上にさながら盤石ばんじやくを置いたようです。

「汝は何者じゃ」

「……………」

「名乗れ！」

「斬れ！」

「汝が主謀しゅぼうと見ゆる、血氣に任せて要いらぬ腕立うでだて、心なくもこの島田に殺生せつしょうさせた、ここに枕を並べた者共もみな一廉ひとかどの劍術じゃ、むざむざ犬死いぬじにさせて何と言訳いいわけが立つ、愚者おろかもものめ」

「一生の不覚、一生の不覚」

土方歳三は血の涙をこぼして、

「幼少より劍を学んで……御身ほどの達人を見分ける眼がなかつたは……それが残念！」

島田虎之助はこの時、抑おさえた膝を寛ゆるめて、

「劍は心なり、心正しからざれば劍も正しからず、劍を学ばん者は心を学べ」

こう言いながら土方歳三の襟髪えりがみを取って突き放すと、よろよろと彼方かなたに飛んで墮どうと倒れます。

高橋と島田と清川とが談笑しつつ行く後ろ影を見送って、やはり呆然として立っているのが机竜之助でした。

竜之助は術も魂も打込んで見惚みとれてしまったのです。前にも後にもこのような鮮やかな手筋を見たことがない、見ようとて見られるわけのものでもない。最初にはなにを島田が！ 次には、ああ思ったより冴さえた腕！ その次は凄すごい！ 最後には神か人か！

だんだんに変化して行く心のうつり目が、かの前後の敵を一刀に斬り捨てたところに至って言句も思慮も及ばなくなりました。そうして最後に到着した結論は「我ついにこの人に及ばず」

です。

この結論は竜之助にとって生命をむしり、取られるほどに辛い、けれども、どの手を行ってもこのほかに打つ手はない。

この時ようよう起き上ったのが土方歳三で、彼は悲憤の涙で男泣きの体です。打ち落された刀を拾い取って同志十三人の死屍縦横たる中へ坐り直し、刀を取り直して腹に突き立てようとする。

愕然^{がくぜん}として醒^さめた机竜之助は、走り寄って土方の刀を押えま

後註

底本：「大菩薩峠 1」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成 6）年 12 月 4 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 3 月 10 日第 5 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 5 月 8 日公開

2004 年 2 月 22 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。